

ふたりの王子

裕川 涼

● PHASE 1 宇宙科学研究所・大介の部屋

街が、燃えていた。デュークは、炎の中を走っていた。ただ、走らなければならないのだということだけがわかっていて。円盤が飛び交い、まだ残っている建物にビームを浴びせて粉砕し、逃げ惑う人々の頭の上から瓦礫を降らせた。デュークは走った。どこへ向かうのかはわからない。突然、円盤が降下してきた。デュークは横に飛んだ。円盤から発射されたビームが、デュークの居た場所を突き抜けた。すぐにデュークは反対側に飛んで走る。数センチの距離で、デュークは円盤のビームを回避した。次にどう撃つてくるか、なぜかデュークにはわかっていた。次は斜め前に飛んで転がる、これで躲けるはずだった。だが、十分余裕があった筈なのに、円盤のビームはデュークの右上腕部をえぐっていた。激痛が走る。デュークは

悲鳴をあげ――

右腕を押さえて大介は飛び起きた。見慣れた研究所の部屋だった。それでもどこに居るかすぐには判然としない。フリードの王子デューク・フリードは地球に逃れ、宇門源蔵博士の息子大介として暮らしてきたことを、夢で混乱した頭で確かめる。途端に腕が痛み、うめき声を上げて、大介は、はねのけた毛布の上に乗って伏した。大声を上げそうになるのを必死でこらえ、歯を食いしばって耐える。フリード星脱出の時、ベガトン放射能で受けた傷は、宇門の光線治療にもかかわらず悪化する一方だった。しばらく体をおぼろげに感じていた大介は、痛みの波が引いたのを見計らって、ベッドから降りた。痛みのせいで完全に目が覚めてしまい、眠れそうになかった。

大介は部屋を出た。夕食後に痛み止めをのんでおいた筈だが、早々に切れてしまったらしい。もともと強い薬が必要だと思ったが、医務室のどこにあるのか、大介は知らなかった。

「少し気分転換でもするか……」

大介は、研究所のヘリポートへと向かった。

● PHASE 2 宇宙科学研究所・レベル4実験室

1 ふたりの王子

研究所の地下深くに、二重構造になった実験ユニットがある。バイオセーフティ・レベル4。感染力の強い致死性の病原体を扱うための部屋である。もともとは、宇宙からやつてくる未知の病原体を扱うことを想定して作られた。

内部を陽圧に保った白い防護服を着て、宇門は、林と一緒に、柴犬の小犬を入れたケージを見つめていた。小犬は、三日前のベガ星連合軍の攻撃の時、円盤のベガトロンビームで左後ろ足を撃たれていた。ベガトロンに汚染されているため人が飼うことはできなくなったのを宇門が引き取ったものだった。宇門は、子犬を専用ケージに入れ、ベガトロン用の光線治療器で治療しながら様子を見ていた。わずか三日で、組織の壊死は半身に及んでいた。最初に撃たれた傷のまわりは皮膚も筋肉も全て脱落し、既に完全に骨が露出していた。左半身の皮膚は広い範囲で剥がれ落ち、筋肉は崩壊して溶け、肋骨の一部が見え始めている。小犬は、宇門を見ると目をあげたが、既に動くことはできなかつた。

「悪化してますね、所長」

「ああ。光線の出力を五割増しにするように改造したのだが、それでも追いつかないようだ」

ケージに取り付けた光線治療器は、宇門が他の仕事

をしている間もずっと動かしてあった。光線には、代謝を高め細胞分裂と移動を促進する働きがある。多少の怪我や病気なら、完全に回復させることも可能である。しかし、ベガトロンの傷を治すには力不足だった。

宇門が見守っていると、小犬の体から急に力が抜け、完全に動かなくなつた。宇門は光線治療器を切つた。

「どうしますか？」

「いつもの通り、保存しよう」

宇門は小犬を試料袋に入れて密閉した。ケージと袋の外側を、アルコールとクレゾールで滅菌した。袋ごと両手で持ち上げて、冷凍室に向かって歩き出した。

「扉を開けてくれ、林君」

林は、試料保管用の冷凍室の扉を開けた。これまでにベガトロンによつて死んだウサギや鳥などの小動物が冷凍保存されていた。攻撃を受けた日時と死亡時刻を記入したラベルが貼られている。宇門は、小犬を空いている棚に入れた。冷凍室の扉を閉め、二人はレベル4実験室の前室に戻つた。防護服を完全に滅菌洗浄した後、脱いで、並んでいるハンガーに吊した。

「今回も駄目だったか」

「所長」

「どうやら我々の光線治療は限界に突き当たったようだ。これ以上、どうしたらいいのか私にはわからん」

「しかし、生存期間は延びています」

「一日半だったのが三日になったただけだ。何の意味がある！」

実験がうまくいかないという理由で宇門が声を荒げることなど滅多にない。

叫んだ宇門に、林は痛ましいという表情を向けた。

光線治療無しでは、ベガトロンビームに撃たれた小動物は、せいぜい一日半しか命が保たない。

「……済まない、つい苛々して」

宇門は、光線治療器を使って、大介の腕のベガトロン放射能による傷の治療を続けてきた。痛みを一時的に止めることはできたが、治すことはできず、戦いでベガトロン光線を浴びるたびに大介の傷は広がり悪化していた。診察した医者も、このままだと腕を切断するしかなくなると宇門に伝えたのは、ついこの間の事だった。宇門は、何とか治療できないかと、光線治療器の改良をしては実験を繰り返していた。実験台になったのは、ベガ星連合軍の攻撃の巻き添えをくって、ベガトロンビームで撃たれた小動物達だった。

地球の生き物はベガトロンに弱かった。人間や大型の動物でも、撃たれて数日で傷口の周囲の組織が広範囲に傷ついて死んでしまう。宇門は、不運な動物たちを使い、どうすれば延命させることができるか、いろいろな方法を試していた。地球の生き物をベガトロン放射能から守る方法が見つければ、大介を治すこともできるかもしれない。しかし、結果は捗捗しくなかった。

「気にしないでください。大介さんのことが心配なんでしょう？」

「地球上の生き物に比べると、フリード星人の方が、ベガトロンにはずっと抵抗力があるらしい。だから光線治療で自然治癒力を高めてこれまでは何とか食い止めてきた。だが、それも限界だ。光線治療の時間をだんだん長くしているのにもかかわらず、大介の傷は広がりつつある。このままベガトロンによる組織の崩壊の速度が、光線治療による治療の速度を上回っていけば、大介は……」

半身の皮膚と筋肉を失って血まみれで倒れる大介の姿を想像し、宇門は首を振った。

「きつと治療法が見つかりますよ」

「そうだといいんだが。これまでのところ、ベガトロン光線で撃たれて命が助かったのは、手足を撃たれた

直後に傷もろとも手足を切断した場合だけだ。治療が遅れると、切断してもベガトロンが全身に回って、結局は死んでいく」

度重なるベガ星連合軍の攻撃で、地球人もベガトロン放射能の被害を受けていた。世界各国の大学病院や研究機関が治療法を探したが、今のところ、早期の外科的処置以外に対処の方法は見つかっていないかった。

エレベーターが研究棟に着いた。宇門と林は廊下に出た。

「観測室へ行くのかね」

歩き出した林に、宇門は問いかけた。

「ええ、所長。当直ですから」

「一人なのか？ 私も手伝おうか」

「いえ、佐伯さんが一緒です。所長はお休みになってください。こここの所ずっと夜中まで実験しておられるでしょう？」

気が張っているからか、宇門は疲れを感じていなかったし、休む気分ではなかった。が、これで今日の仕事から解放されるのなら、大介の様子を見に行ける。

「ありがとう。では私はこれで休ませてもらうよ」

宇門は、仮眠室のある研究棟へと向かった。

● P H A S E 3 宇宙科学研究所

仮眠室は、ビジネスホテルのやや広めのシングルルームのような構造で、ベッドとライティングデスクが置かれていて、服をかけるスペースがあり、ユニックトバスを備えていた。作業が立て込んでいる時は、所員たちが入れ替わり立ち替わり使っていた。最近では、ベガ星連合軍の攻撃の頻度が上がったため、戦闘チームも泊まり込みになることが多く、誰がどの部屋を使うかが大体決まっていた。

宇門は、大介の部屋の前まで来て、そつとドアノブを回した。鍵はかかかっていない。宇門はドアを開け、中に入った。

ベッドに大介の姿は無かった。乱暴に跳ね上げられた毛布が目に入った。宇門は、ベッドに手を触れた。まだ暖かい。大介が出て行ってから時間はそれほど経っていない。

「大介……一体どこへ行ったのだ」

いつ緊急出撃があるかわからない状態だから、牧葉家に行ったり帰宅したりということはあり得ない。観測室や作業場に居れば、大介の傷の具合や体調を知っている所員たちが放ってはおかないはずである。宇門は扉を閉めて医務室へと向かった。

医務室は静まりかえっていた。人が来た形跡はなかった。処置室も手術室も検査機器を置いてある部屋も、誰かが来て触った形跡は無かった。

宇門は、医務室のインターホンから観測室を呼び出した。

「林君、居るかね？」

「所長、何かあったんですか？」

「仮眠室に大介の姿が見えないんだが……」

「ええっ！ こちらには来ていませんが」

「わかった。では、ここ一時間ぐらいの入退出の記録を調べてくれ」

至る所にある監視カメラの映像を早送りしながら探すよりは、ドアの開閉やカードキーによる入退出の記録一覧を見る方が早い。インターホンの向こうでキーボードを叩く音がした。

「ヘリポートのドアに出入りがあったようですね。他はカードリーダーを通してますから、誰が出入りしたかはわかってますし」

ああ、と宇門は腑に落ちた。一人になりたいとき、何かを考えたいとき、悩んでいるとき、空を見ながら佇んでいるのが大介の常だった。牧場で暮らしていた頃は外でギターを弾いていることも多かったが、研究所に居る時のお気に入りの場所は見晴らしのいい

ヘリポートだった。

「実は結構人気あるんですよ、休憩場所として」

「何、ヘリポートがか？」

「そうですね。宇宙に一番近い研究所の中で、一番良く星が見える場所ですから」

宇宙望遠鏡の観測映像であれば、二十四時間いつでも観測室のメインスクリーンで見ることができる。電波望遠鏡の観測結果も随時更新され、山田の前のディスプレイに表示されている。観測室の装置を使えば、人間の目で見るとよりも遙かに豊富で正確な観測情報を取り出せる。だが、ディスプレイ越しに見る宇宙には、直接目で見るほどの奥行きは感じられない。拡がりを感じられるとしたら、それはデータを受け取る側の知識によってでしかない。たまには自分の肉眼で見たいという気持ちは宇門にもよくわかった。研究所を作るはるか以前、宇門もまた一人でそうやって星空を見上げていたからだ。

研究所の人間にとって、宇宙は目指すべき場所であり、これから出て行くという未知の世界である。だが、隣の銀河から来た大介はどうなのか。地球は第二の故郷だと口癖の様に言っていたが、地球上で一番宇宙に近い場所から星を見て何を思うだろう。

「わかった。ありがとう」

一旦ヘリポートに出た後、保守点検用の通路と梯子を使えば、スペイザー発射台の最上部までたどり着ける。が、怪我をしている大介がそこまで登ることはまづないだろう。医務室の照明のスイッチを切り、宇宙門は歩き始めた。

● PHASE 4 宇宙科学研究所・ヘリポート

宇宙科学研究所のヘリポートは、対空ビーム砲を備えた巨大なスペイザー発射台に囲まれている。

エレベーターで上にながってヘリポートに出た宇宙門が見たのは、ヘリポートの縁に立ったまま、右腕を押しえている大介の姿だった。

「大介」

声をかけながら、宇宙門は近づいた。大介が振り向いた。疲労の色が濃い。パジャマのまま居るところを見ると、起きてそのままここに來たらしかった。

「どうしたんだね、一体」

「目が覚めてしまつて、眠れなくて」

「傷が痛むのか？」

宇宙門は大介の左側に立ち、大介の右肩にそつと触れた。夕方巻いた包帯はそのままになっていた。

「痛みもあるんですが……フリード星の夢を見て目が

覚めました。地球をフリード星の二の舞にするわけにはいかない」

大介の視線の先には赤い月があった。月が赤く染まるとベガ星連合軍が出撃してくるのが常だった。このところ、月はずっと赤いままであった。

「それはそうだが、あまり張り詰めていては保たないぞ」

「奴ら、地球に基地を作るのに失敗したので、今度は数を揃えて攻撃に来るに違いありません」

「そうだな。ますます油断はできない。私達ももっと戦力になればいいのだが、地球の技術では今の対応で精一杯だ。傷ついたお前を頼るしかないのが心苦しい」

宇宙門は、部屋にもどろう、と大介をそつと抱き寄せた。そのままエレベーターに向かう。

「とんでもありません。父さんたちのおかげで、フリード星人の仇を討てるんですから」

大介は、一歩歩く毎に傷に響く痛みを堪え、体をこわばらせていた。肩を抱き寄せた宇宙門は、それを敏感に感じ取った。これは、仇討ちの手助けをしているのか、それとも仇を討ちたいと願う大介を利用して地球を守ろうとしているだけなのか。あれほど乗りたがらなかったグレンダイザーに、今は積極的に乗り込み

先頭に立つて戦う大介の変化を目の当たりにし、しかもその姿を不審に思わなくなっていることに気づくと、自らの深層心理すら測りかねた。

「大介、一旦医務室に行つて手当をしよう。痛みを少しは抑えられるかもしれない」

● PHASE 5 宇宙科学研究所・医務室

ベッドの上に大介を寝かせ、パジャマの上着を脱がせて包帯を外した。ベッドを取ると、皮膚が剥がれ、上腕部の筋肉が剥き出しになった傷が見えた。組織が壊死して剥がれ落ちたため、筋肉はかなり細くなっている。このままでは、一ヶ月経たないうちに骨まで見え始めるに違いなかった。

宇門は光線治療器を出し、スタンドに固定した。腕に向けて青い光を照射した。

「治すのは無理だが、傷が拡がるのを少しは防げるだろう」

言つてはみたが、気休めであることは宇門にもわかっていた。夕食が終わってから念入りに光線治療を行い、消毒して包帯を巻いて休んだにもかかわらず、大介は痛みで目が覚めてしまったのだ。今光線治療をしても、痛みを抑えられる時間はせいぜい四時

間。明け方にはまた痛み出す。

「内服の痛み止めは気休めにしかならんようだし、局所麻酔もベガトロンの傷には効かない。地球人の薬がどれだけフリード星人に合うかわからないが、もう少し強い薬を使つてみるという手が無いわけでは無い。どうするかね？」

「試してみてください、父さん。このまま眠れなければ、体力を消耗する一方です」

宇門は、薬品庫の鍵を開けた。奥にしまわれていたアンプルを取りだしてカットし、注射筒に液体を吸い込んだ。

「これは麻薬だ。中枢に直接作用して痛みを止める。末期癌の患者にしか使わないような劇薬だ。フリード星人に使つた場合、どんな効き方をするかがわからなかったから、これまで使うのを控えていた。だが、そうも言つていられないようだ。慎重に少しずつ使つてみよう」

宇門は、一回分の四分の一ほどを大介に注射した。「無事に効いてくれたとしても、どういう副作用が出るかがわからん。異状を感じたらすぐに言つてくれ」

大介は目を閉じたまま頷いた。宇門は、注射筒を専用容器に棄て、処置室の隅にある端末から、薬品使用の記録を入力した。光線治療器

を止め、傷口に消毒用のスプレーを吹いたあと、新しいパッドを取り出し、傷に当てた。

「父さん、包帯はまかないでください。何だか締め付けられる感じで動かせないんです」

「それなら、しつかりパッドを当てて、粘着シートを上から貼って止めるだけにしよう」

剥き出しの傷口から菌が入れば、重篤な感染症を起す。光線治療のあとの滅菌と、傷口の密閉は完全に行っておく必要があった。

手当が終わり、大介はベッドの上に腰掛けて、パジャマの上着を着た。

「包帯よりは動かしやすいですよ」

腕を回そうとした大介が急に黙る。

「大介、無茶をするな」

宇門は何と言葉をかけようか迷った。腕が動かしづらかったのは包帯のせいではない。筋肉の一部を失ってしまったからだ。そのことに気づいた大介のシヨックを考えると、いやがられても、無理矢理包帯を巻いて動かせる範囲を限っておくべきだったかと宇門は後悔した。

「もう、この腕で昔みたいに殴り合いなんかできないんだ……」

「大介、お前案外乱暴者だったんだな」

宇門は大きさに呆れて見せた。

「親友が……居たんです」

宇門は、大介の隣に腰を下ろした。

「話を聞かせてくれるかね」

「名前はモルスって言うんです。彼はモール星の王子で、フリード星に留学しに来たんです。僕たちはすぐ仲良くなりました。他愛も無いことで毎日取っ組み合いしたり、殴り合ったり、仲直りしたり……」

「お互い、力を試したい年頃だったんだらうね。私にもそんな時期があったよ」

「父さんですか！」

大介は驚いて宇門を見つめた。

「まあ、男の子はみんなそんなもんじゃないのかね。地球でも、フリード星でも」

「馬に乗って、フリードの緑の大地をどこまでも走って競争したり。あの時は、地平線の果てまで行くんじゃないかと思った」

「フリード星にも馬が居たのかね」

「地球のものは少し違うんですが」

「それで、牧場の仕事を始めたとき、最初から馬にのって駆け回れたのか、と宇門は納得した。

「しかし、何だか遊んでばかりいたみたいだな」

「それは違います、父さん。モルスは、フリード星の」

進んだ科学を学ぶために来たんです。だから、授業があるときは僕たちは真剣でした」

「ひよつとして、試験の点数でも競っていたのかね」

「え、ええ……」

「ガリ勉には見えないがなあ」

宇門は笑った。ひどいや、と大介も苦笑する。

「競争ばっかりしてたわけじゃないですよ。一緒にギターを弾いて語り合ったりもしました」

「じゃあ、時々弾いていたあの曲は……」

「モルスと一緒に弾いていたものなんです」

宇門は唸った。

「何というか……地球で穏やかに暮らすためのあれやこれやを、大介はモルスと過ごすことで身につけたんだな」

「甲児君と最初に出会って、真剣に突つかかって来られたとき、僕は甲児君の中に、親友の面影を見ていたのかも知れない」

「そうだったのか」

大介を息子にする^と決めたとき、大介には誰か友人が必要だと考えたことを宇門は思い出した。宇門が後見人のポジジョンをとってしまつと、大介と対等な友人の関係を作るのは難しい。できれば同世代の誰かが望ましいのだが、とずっと考えていた。だから、

甲児を研究所に迎え入れた時、密かに、大介の友人になつてくれるのではないかと期待したのだつた。今のところ、甲児は十二分にその期待にこたえてくれている。

「で、モルスはどうなつたんだ？」

「彼もなかなか波乱の人生を送ることになりましたよ。留学している最中に、本国の王が死んだんです」

「彼のお父上が？」

「そうです。公式には病死と発表されましたが、後の調査ではおそらく暗殺されたのだろうということでした。そして、モルスが王位継承者として名乗りを挙げる前に、王の印しるしを手に入れたモルスの叔父が王位を継いでしまつた。これが野心家の国王で、周囲の国を征服しようとして戦争を始めたんです」

「それはひどいね」

宇門はため息をついた。侵略を仕掛けるのはベガ星連合軍だけではなかつたのだ。覇権を追い求める者が居るのは、宇宙人でもありふれたことらしい。

「おかげでモール星は荒れ果てていきました。しかし、フリード星は中立を守ると宣言していたので、侵略されている国を積極的に援助することはありませんでした。そして、モルスを保護し、誰にも手は出させない、そのかわりモルスを争いに介入させることもし

「ない、と発表したんです」

「なるほど。その立場の王子なら、生きているだけで反乱勢力のシンボルになってしまふな。へたに自由にさせておいたら、現政府からは暗殺のターゲットにされるだろう」

「でも、国民思いのモルスは納得しませんでした。仲間と一緒にフリード星の円盤を奪ってモール星へ帰ろうとしたんです。フリードの軍隊がそれを察知してモルスを追いました。モルスは逃げ、最後は僕一人で追いかけた」

「無事に説得できたのかね」

「いいえ、モルスの意志は固かった。モルスは僕に銃を向け、人質になってくれと言った。フリードの王子が人質なら軍隊も手出しができないだろうと」

「よほど追い詰められていたんだね、かわいそうに」

「だから、僕も銃を抜いて彼を……」

大介の声が震えた。

「撃つたのか」

「でも、軽い怪我をさせただけです。僕はモルスをを手当してかくまいました。モルスが出て行きたがったので、ちよっぴり強めに麻酔をかけたりもしました。……傷が治って動けるようになった時には、戦争好きの王は、戦争に負けて死んでいました。モール星

は、新しい王を必要としていた。モルスは留学の半ばで国へ帰りました。国王になるために」

「地球でも似たような話はあちこちにあるが。で、その後もモルスとの交流は続いたのかね」

「国民を大切にする王になったという噂はきいてました。今度は僕が会いに行こうと思っていた矢先に、フリード星はベガ星の総攻撃を受けました。生き残った僕がモルスを頼ったら、今度はモール星がベガ星にやられる。だから僕は、フリード星に生存者が居なくなったと確信したとき、そのまま星系を離れたんです」

「そうか。辛かっただろうが、大介、どこに行っても新しい友達はできる。過ぎてしまったことは仕方がない。今は前向きに生きることが、生き延びることを考えるんだ」

宇門は大介の横顔を見つめた。疲れてはいるが、思い出話をして少し気が楽になったのか、表情が和らいでいた。

「痛みはどうかね？」

「もうほとんど感じません。薬が合っているのかもしれない。それに何だか眠くなってきた……」

「そうか。ではもう休みなさい」

宇門は、大介と一緒に医務室を出た。

● PHASE 6 宇宙科学研究所・所長室

大介を仮眠室に連れて行き、寝かせた後、宇門は観測ドームに上がった。大介はあつきり眠りに落ちたが、宇門の方は目が冴えてしまっていた。林の仕事の邪魔をしないように、観測室には寄らず、そのまま同じフロアにある所長室に入った。

机の上には、印刷物や写真が置かれていた。昨日までの光線治療の実験の記録だった。子犬が運び込まれたので宇門はそちらを観察するのに忙しく、細胞を使った実験の一部は所員に頼んでやつてもらった。その記録が届けられたらしい。宇門は、留められていたクリップを外して資料を机の上に広げた。

壁全面に作り付けてあるキャビネットを開け、ブランドーの瓶とグラスを取り出した。ボトルの蓋をとって、机の上に置いた。左手にグラスを、右手にボトルを持って、窓際に立った。グラスに少しだけ注ぎ、掌で暖め、香りを楽しみながら飲むのが本来の楽しみ方だったが、宇門は勢い良くボトルを傾け、グラスの容積の半分以上まで注いだ。口に含む。ゆつくり味わう気分になれず、そのまま飲み込んだ。

研究所の敷地内の照明も消えていた。観測室から漏れ出す光が、研究所の敷地内を照らしているだけ

だった。その向こうには深い闇が拡がっていた。

今晚のパトロールは国防軍が引き受けてくれた。明日になれば、今度はダイザーチームもパトロールに出ることになる。国防軍の戦闘機部隊では、ミディフォアの相手をするのは苦しい。編隊を組んで地球に侵入してこられたら、ダイザーチームでない限り撃破できない。このため、可能な限りダイザーチームもパトロールに出て、侵攻があつたらできるだけ早く迎撃できるようにしておく必要があつた。

「大介……」

もうこれ以上大介に負担をかけたくない、だが、大介とグレンダイザー無しでは地球は救えない。そしてこのまま治療法が見つからない限り、大介は死ぬ。せいぜいあと半年といったところか。何度かグラスを空にした後、宇門は、ボトルを机の上に置き、代わりに写真を手に取った。再び窓に向かつて立ち、映っている自分自身の姿を睨み付けた。他に何かできることは無いか、何か見落としてはいないか。ブランドーを口に運びながら、無力さに打ちのめされることから逃れようとして写真を見つめた。

「所長」

突然、後ろから呼ばれて、宇門は振り返った。入り口のところに林が立っていた。自分で思ったよりも

酔いが回っていた。バランスを崩し、背中で窓に凭れる。グラスに入れたブランデーをこぼしそうになり、慌てて空にした。

「部屋のドアが開いていたので何かあったのかと思つて。大介さんには会えたんですか」

「ああ、少し具合が悪そうだったから、手当をして寝かせてきた」

宇門は、グラスを机の上に置き、ブランデーを注いだ。液面に目を落とす。

「お休みになったんじゃないですか」

「そのつもりだったんだが、どうも眠れそうになくてね。やはり、生き物を扱う実験は勝手に違うな。昼の間ずっと変な風に緊張を続けていたらしく、神経が昂ぶって目が冴えてしまった」

宇門は、注いだ分を飲み干した。ひつく、と胸を波打たせ、深呼吸する。

「だいぶ飲んでおられますね。大介さんが気がかりなのはわかりますが、もうそれくらいにしておいた方が」

林はボトルの蓋を閉めた。

「そう……かな。いつもと変わらないつもりだが。やけ酒を飲んでるようにでも見えませんか？」

「やけ酒の方がまだマシですよ。少なくとも憂さ晴ら

ししようつていう感情が見える」

林は、やれやれ、とため息をついた。

「どういうことかね」

「最初見たときは、お酒を飲んでるように見えなかったんですよ。何か薬を飲んでるのかと思つたんですけど、機械的に流し込んでいるだけ、っていうか」

「そんな風に見えていたのか」

鎮静剤代わりに飲んでいたのが態度にまで出たか、と嘆息する。

「それに、そういう飲み方は……」

「体に良くないのはわかっている」

「いや、むしろ酒に失礼でしょう」

林は、机の上のボトルを手にしてラベルを眺めた。

「大体、これ高級品だし。ちゃんと味わって飲まないで勿体ないですよ。別に、所長の懐具合を気にしてるわけじゃありませんがね」

宇門は苦笑した。

「飲みたければ好きにしてください」

「今夜は仕事がありますからね。次の機会に遠慮無く」

宇門は立ったまま両手を机の上に突いて、昼間行われた実験の写真を凝視した。大介の傷の検査と、細胞培養実験の顕微鏡写真だった。光線治療で傷ついた

細胞は明らかに復活している。特に神経細胞の回復が先行しているように見える。それなのに何故、ベガトロンビームの攻撃の度に傷が悪化するのか。理由を突き止めるために、最初にデュークを手当てした時から保存し培養を続けていた細胞を使った実験を思いつき、大井に指示を出したのが昨日だった。

「所長、飲み過ぎてご気分が悪いんじゃない？」

「ああ、いや、大丈夫だ」

「でも、真つ青ですよ」

何と説明しようかと宇門は考えた。すでにかかなり酔いが回つていて、うまく言葉にできない。何度か深呼吸して息を整えながら、思考を集中する。

「フリード星人の細胞は、光線治療器で回復する。地球の生き物に対してあの光線を使った時よりもよく効くらしい。特に神経細胞の回復が早い。しかし治療によつて、既に入り込んでしまっているベガトロンを追い出せるわけではない。つまり、光線治療で治った部分は再生して時間が経っていない上に常にベガトロンに傷つけられつつある。そのような細胞は、ベガトロン放射能に対して敏感で弱いのではないか。だから、戦いでベガトロン光線の攻撃を受ける度に、せつかく再生した部分がまた死んでしまう。しかも、神経の再生が進んでいる分だけ、細胞が死ぬ時の

痛みも激しい」

「それじゃあ……」

机の上の実験記録を広げ、所員が作ったレポートを見た。ベガトロンを含む細胞と含まない細胞で、光線照射を行つてから、一定時間毎にX線やγ線を照射した結果がまとめられていた。ベガトロンを含まない細胞は、光線治療の後、X線やγ線の影響を受ける期間がごく短いのに対し、ベガトロンを含んでいる細胞はいつまで経つても感受性が高いままで、簡単に死んでしまうという。

「どうやらベガトロンは細胞周期にも影響するらしい。ベガトロンビーム発生装置の代わりに、放射線治療用の線源で試してみた実験結果から、今日わかったことだ。ベガトロンビームの発生装置が手に入れば、きちんと確認できるのだが……」

ベガトロン放射能の傷を治すには、まずは悪化の原因を突き止める必要がある。得られた結果は治療に役立つ筈のものであった。だが、この実験のアイデアを思いついたとき、ごくわずかの間だったが、大介のことは完全に頭の中から抜けていた。これでベガトロンに関する知識が一步前進するという高揚感から、大井に仕事を急がせたのだ。息子として扱うと言っておきながら、科学のメスだけは冷徹に振るつたという

事実を、宇門は引き裂かれる思いで受け止め、耐えきれずに目を閉じた。

「私は大介を助けるつもりで、苦しみを長引かせたのかもしれない。放っておけばおそらく神経から壊死していくから、傷が悪化しても痛みはそれほどひどく無かったはずだ。しかし、光線治療で再生を速めなければ、傷の広がり具合はもっと早くなって、今頃は腕が無くなっていたかもしれない」

最初に痛み止めが効かず、光線治療に切り替えた後は、治療後に痛みが治まっていたので、それ以上何もしなかった。そこで考えるのを止めず、効く痛み止めを本気で探して見つけていけば、大介の苦痛はもっと少なくて済んだのではないか。見落とした、という後悔。今は眠っているはずの大介の姿が脳裏に浮かび、その姿に向かつて心の中で詫言った。

「所長？」

目を開くと、林が怪訝な表情で宇門を見つめていた。宇門は、レポートの束を見て、机の中からメモパッドを取りだし、化学構造式を書くと、林に手渡した。

「佐伯君に頼んで、これを大至急作ってもらってくれ。研究所の設備だけで作れるはずだ。精製が終わったら瓶に詰めて、熱で滅菌した後医務室に置いておいて

くれ。濃度の記載を忘れないように。ともかく、私はもう休む。明日また考えよう」

● PHASE 7 宇宙科学研究所・観測室

ベガ星の侵攻が激しくなってきたからは、日本領空を四分割し担当区域を決めてパトロールすることになっていた。第一区域は日本海側、第二区域は四国から九州にかけての南方、第三区域は東北から北海道、第四区域は太平洋側である。それぞれ、順番に、大介、ひかる、マリア、甲児に割り当てられていた。

朝の打ち合わせのために四人は観測室に集まっていた。

「円盤の攻撃で地上に被害は出したくない。できるだけ上空で食い止めてもらいたい」

宇門は、四人を前にして椅子から立ち上がった。

「了解、出動するぞ！」

大介のかけ声とともに、四人は観測室をかけたでしていく。その後ろ姿を見送りながら、宇門は、息子にするなどと言っておきながら結局労働することすらできずに出撃命令を出している自分が嫌になった。

勿論研究所は軍隊ではないし、実のところ宇門に出撃命令を下す権限も根拠もない。大介とマリアはフ

リード星の敵を討つという大義名分があるが、甲児とひかるは、大介を助けたいという気持ちから戦いに巻き込まれているだけである。それでも、宇門は、グレンダイザーにとつて必要だからという理由で三機のスペイザーを開発し、三人に使わせ、戦いの指示を出し続けてきた。

ボランティアアの戦闘要員と指揮官で地球防衛戦をやる羽目になるとは、と宇門は心許ない思いで中央の椅子に座った。

グレンダイザーの発進ルートを示すパネルのランプが点滅する。索敵されている様子が無いことをレーダーで確認し、林が発進許可を示すスイッチを押した。研究所のダムの正面の発進口が開いて、グレンダイザーが飛び立っていく。

「防御シャッターを開けます」

宇門は、林の方を見て頷いた。スペイザーの発進準備が整い、シャッターの移動を示すランプが点灯、続いて発射塔が動き始めたことを示すランプが点灯した。一分経たないうちに、シャッターオーブンのランプと発射塔の移動完了を示すランプに切り替わった。モニターのスイッチを入れると、三機のダブルスペイザーの操縦席の映像が現れる。次々に入る発進の合図とともに、観測室上空に、光子エンジンの音が響

き渡った。

「ベガ星の奴ら、攻めてくるでしょうかね」

「とにかく今はできることをするしか無い。我々に選択の余地はあまり無いのだ」

佐伯に向かって答えてはみたが、それは、自分に向かって言い聞かせる言葉でもあった。

デュークが初めて地球に来た時、グレンダイザーもろとも保護するだけの設備を宇門は既に持っていた。ベガ星連合軍の攻撃が始まってからは、地球人の技術では到底太刀打ちできず、グレンダイザーに戦ってもうしかなかった。支援メカの三機のスペイザーが必要になったとき、作るだけの技術も材料も用意できた。何をなすべきかわかっていて自分ができる立場に居たから、やるべきことをしてきただけだ。

「ロングレンジレーダーの映像を出します」

林は、発進時のモニターを普段通りに実行していた。メインスクリーンに、輝く四つの点が現れた。一旦集まった後、四方へと散っていく。

「侵入を見張る目は多いほどいい。研究所のレーダーでも監視を続けるんだ」

「しかし、奴らはいつものどこから来るんでしょうね」

大井は、人工衛星のトラッキングチャートを睨んでいた。研究所の宇宙望遠鏡の位置が時々刻々変化し

ていく。

「鍵を握っているのは案外、月、かもしれないな」

昨日、大介と見た月が脳裏に浮かぶ。

「は？」

「奴らの攻撃の前には月が赤く染まる。大介は攻撃の狼煙だと言っていたが、わざわざ予告する必然性がない」

話をしているうちに疑念が確信へと変わる。

「確かに、奇襲攻撃する方が効果的な筈ですよね」

「その通りだ。それなのに毎回月の色が変わるというのは、理由があるに違いない。最も考えられるのは、攻撃が原因ということだ。つまり、月か、月にごく近いところで攻撃の準備が行われている可能性がある」

メインスクリーンのレーダーを見つめた。四機とも順調に飛行している。

このところ、このスクリーンが映し出す月はずっと赤いままだった。だから毎日のように警戒態勢でパトロールを続けることになっていく。気になって何度か宇宙望遠鏡で拡大してみたが、ラグランジュ点のあたりには何も見つかっていない。

「だとすると、月の裏側かその上空……」

山田が、眼鏡の奥で神経質そうに瞬きをした。

「パトロールの支援で大変な時期だが、並行して探査

機を飛ばそう。大学の使っている打ち上げ施設を借りて、ペンシルロケットで目立たないように打ち上げるんだ」

有人ミッションまでこなす宇宙科学研究所にとつては、ペンシルロケットの打ち上げはむしろ楽な作業である。全員であたる必要もないか、と考えた時、連絡が入った。

北に向かったマリアと、南に向かったひかるは揃って「異状なし」と報告してきた。観測室の空気が緩む。まだ大介と甲児の報告が入っていない、と宇門は気合いを込めてレーダーを見つめた。

「第四区域異状なし」

甲児の声がスピーカー越しに響く。今日も何事もなく終わるか、という期待は、続く甲児の叫びで消え去った。

「何かが大気圏に突入した！」

声を聞くなり所員たちは一斉に席の前のモニターを注視する。

「レーダーにも反応。大気圏外からです！ 大きさを見ておそろくベガ獣」

一呼吸おいて宇門はマイクを取り上げた。

「こちら宇宙科学研究所。国防軍に連絡。第四区域に円盤出現。ベガ獣と思われる」

スクリーン上のマーカーから目を離さずに、宇門は一気に言葉を吐き出した。ミディフォーなら空軍でも差し違えるつもりでかかれれば墜とせるが、戦闘機のミサイルや機関砲ではベガ獣には歯が立たない。通信は、余計な手出しをして犠牲を増やすな、という意味でもあった。それを理解できなければ部隊は全滅するが、彼らとて場数は踏んでいる筈だ。余計な注意喚起は不要と判断し、宇門はマイクを置いた。

「接触まであと三分」

林の声が観測室に響く。スクリーンの上で輝点二つが距離を詰めていく。

「一機だけか」

宇門は訊いた。よほどの隠密行動の時以外、ベガ獣は必ずミディフォーの編隊を伴っていた。

「一機だけです。他の空域に異状はありません」

なぜ一機だけで？ という疑問がわき上がる。一番可能性が高いのは陽動だろう。それならば出す指示は一つしかない。

「ダブルスペイザーとマリンスペイザーはそのままパトロールを続行」

どんな敵かは接触すればわかる。ダブルスペイザーもグレンダイザーもカメラを持っているから、パトロールや戦闘の間はリアルタイムで映像を送り続

けているし、研究所との双方方向通信も常に維持されている。宇門は、メインスクリーンをダブルスペイザーからの映像に切り替えた。

● PHASE 8 太平洋上

接触は俺が最初だ。甲児は、スロットルレバーを両手で引いた。

光量子エンジンの青白く輝く噴射光を吹き出した。振動が操縦席に伝わってくる。長いヴェイパー・トレイルを引きながら、ダブルスペイザーは加速を続けた。軽く音速を超える。

上空から降下してくるカプセル状の球体を甲児は捕捉した。リーダー上の輝点には速度が同時に表示されている。秒速十キロメートル軌道速度のままほとんど減速していない。このままだと遭遇はするが、一瞬ですれ違う。ミサイルでは間に合わない。

「サイクロン・ビーム!」

かけ声とともに左手でビーム発射レバーを引く。翼の発射装置からまっすぐに光が伸びた。わずか数秒、ビームの到達を目標する暇もなく、円盤の衝撃波でダブルスペイザーははじき飛ばされた。姿勢制御のために飛行コンピューターが強制介入し、両翼の光

量子エンジンを噴射する。

「直撃したはずなのに！」

甲児は機首を光球へと向けた。円盤は東京への進路を取りながら急減速していた。思ったより早く追いつけそうだ。サイクロンビームを撃ちながら距離を詰めるが、反撃がない。

「全く効かないってのかよ」

これまでのベガ獣は、サイクロンビームを装甲で防いではいても、まともに命中したらそれなりに反応していた。円盤形態からロボット形態に変わって反撃したり、あるいはビームの衝撃で飛ぶ向きが変わったりした。だが、何の変哲もないカプセルは様子が違った。攻撃を受けていることをまるで意に介していない。飛行の方向からみて、迷うことなく東京に向かっている。

早く撃墜するか、撃墜できないまでもこちらに注意を向けさせないと大変なことになる。上空で食い止めるというのが所長の指示だ。それならエネルギーを使い切つても墜としてやる。甲児は、ビーム発射レバーを引きっぱなしにして、真後ろから撃ち続けた。

● PHASE 9 日本上空

ベガ獣が出現したという甲児の叫びと同時に、デュークは両側の操縦桿を引き、グレンダイザーを反転させた。

『大介さん、私達も応援に……』

『博士はまあ言つたけど……』

パトロールを続行せよとの宇門の指令に反してでも、応援にかけつけないというひかるとマリアの気持ちは痛いほどわかった。腕の傷の治療が捗捗しくないうことは二人とも知っている。デュークは一瞬だが心が揺らいだ。だがすぐに宇門の命令を復唱する。

「ひかるさんとマリアはパトロールを続けろ」

通信機を通して逡巡が伝わってくる。それをわざとに無視してデュークは続けた。

「これは命令だ！」

ベガ獣が単機で攻撃をかけてきたことをグレンダイザーのリーダーも捉えていた。その一機に火力を集中して裏をかかれたら被害は甚大なものになる。

二人の返事を待たずに、デュークはグレンダイザーをフルパワーへと持つていった。出力を示すゲージが赤に変わる。空力加熱で流星のような光をまとい、日本上空を突き進んだ。フォッサマグナに沿って、あつざりと本州を横断、甲児の居る空域へと向かう。

目視できる距離まできて、グレンダイザーは急減速した。地球の機体ならパイロットは内臓破裂では済まない加速度だったが、重力も慣性も操るグレンダイザーの操縦者にその負担がかかることはない。

上空から円盤が降下してくる。ダブルスパイザーが追いかけるが、サイクロンビームを撃ち続けているが、円盤には何の影響もない。

「スペースサンダー！」

グレンダイザーの頭部から稲妻が逆り、丸い円盤の装甲を吹き飛ばした。巨大な卵の殻を両側に脱ぎ捨て、鋭い翼が現れる。垂直に近い角度で追いつがっていたダブルスパイザーが、間一髪で衝突を避け、下に向けて飛び去って行った。

翼のある馬が空中で動きを止めた。形は巨大なペガサスだが、黒く空いた眼窩と骨だけの足、しわだらけの首、胸から生えた巨大な角は、この馬が死を運ぶものであることを全身で主張していた。嘶くような仕草をするその背後を、反転して戻って来たダブルスパイザーが急上昇していく。

「何だよその骸骨は！」

甲児の素つ頓狂な叫びがスピーカーから響いた。

ベガ獣は、ベガ星系の生物と機械を融合させた兵器で、戦闘機械としての力と、元となった生き物の敏捷

な運動能力を併せ持つている。

「生き物ではなく生ける屍シビレをベガ獣にしたのか」

「屍ではない。ベガ獣ジガジガは、ベガ星の爆発を受け、ベガトロンエネルギーを吸収して、この姿になったのだ」

デュークの耳に、聞き覚えのあるかつての親友の声が届いた。まさか、と目をこらした。

ジガジガは首を振り、嘶く仕草をする。全身がベガトロン特有の赤い光を放った。

「私はベガ大王親衛隊長、モルス」

本当に自分の知っているモルスなのか、と、デュークは操縦席で凍り付いた。本当にお前なのかと尋ねる前に、まっすぐ飛び込んできたジガジガの角が、グレンダイザーを下から突き上げた。視界が一瞬青一色になり、シートから引き離されそうになりながら、操縦桿を握って姿勢を立て直す。グレンダイザーが空中で一回転しながら再びジガジガに正対した時、右腕の傷に刺すような痛みを感じた。

「モルスの王子のモルスなのか」

信じられない思いで言葉を絞り出し、背中が痺れるような驚愕を振り落とすように、デュークは操縦席で身を乗り出した。

「知ってる奴なのか？」

「甲児が問いかけてくる。

「モルスはフリード星に留学していた事がある。僕たちはその頃親友だった」

親友、という言葉に、無意識に力がこもった。同時に、それを過去形で語ってしまったことにも気づいて愕然とする。

『今は敵だ』

追い打ちをかけるように冷ややかな声が操縦席を震わせた。見えない地面をジグザグに走るような仕草で飛んできたジガジガが、後足を伸ばして上昇する。一瞬、デュークの視界から完全に消えた。直後、スペイザーは真上から巨大な角に叩かれた。躲すつもりで操縦桿を引いたが間に合わず、ぶつかつた衝撃で、グレンダイザーは回転しながら高度を下げた。

ぐるぐると回転する視界に、海面が迫ってくる。両サイドの操縦桿に力を込めると、グレンダイザーは姿勢制御を始めた。慣性制御だけでは追いつかず、スペイザーの後ろの巨大なノズルまで動員して、海面ぎりぎりまで落下を止めた。光子エンジンからの噴射を海面に叩きつけ、爆発的に水を蒸発させながら、グレンダイザーはジガジガへと機首を向けた。

『デューク、合体して戦おう』

追いかけてきたダブルスペイザーが機首を上げ、相

対速度を合わせて来る。

「モルスは僕一人で倒す！」

ジガジガに向かって飛びながら、操縦席のレバーを引く。「シュート・イン」のかけ声とともに、操縦席がグレンダイザー頭部へ向かつて移動する。

この瞬間に攻撃してくるか？ と心の片隅で思い、大丈夫だ、と瞬時に打ち消す。座席移動の途中を狙われると何もできないという弱点は、甲児も知っている。移動の間は甲児が守ってくれる、という信頼と安心感は、幾度にもわたる戦いの中で培われたものだった。

「ダイザー・ゴー！」

分離レバーを引いてスペイザーの前方にフリードの守護神が飛び出す。速度を合わせて下に回り込んだスペイザーがその巨体を受け止め、ジガジガに向かう。

「ダブルハーケン！」

ダイザーの肩から三日月状の刃を持ったハーケンが飛び出した。頭上で二本を合わせ、右手で持ったまま、ジガジガに斬りつけた。

「モルス、なぜお前がベガ大王親衛隊長なんだ」

ジガジガが胸の角を振って、派手な火花と共にハーケンをはじく。ダイザーの右腕が上がり、がら空きに

なつた胸に、ジガジガの角が突き出された。

『モール星はベガ星連合軍に加わった』

上半身をひねって直撃を避けながら、ジガジガの後ろに回り込む。振り向く間もなく、ダイザーはハーケンを後ろに向かつて振った。

「平和を願ったお前が何故？」

ジガジガの速度がわずかに速かった。ハーケンが空を斬る。

『ベガ星連合軍に加わることが、モール星の未来のためになるからだ』

「そんな筈はない！」

グレンダイザーはジガジガに向き直った。突っ込んでくるジガジガに向かって、両手でハーケンを振り下ろした。ジガジガは半歩下がって刃をかわし、タイミングをずらして胸の角でハーケンを下に叩いた。

『ほう、それならお前はこんなところで一体何をしているんだ？』

力を逃がされ勢い余ったダイザーがスペイザーの上で膝をついた。操縦席から見下ろすデュークの間には、はるか下に、青い海と海岸に突き出した半島の緑が見えた。

「地球は僕の第二の故郷だ。ここの人達を守ってベガ星連合軍を倒す。フリード星の仇を討つんだ」

顔を上げ、モルスを睨み付ける。

『ここが第二の故郷だと？ 仇討ちだと？ 一体誰に洗脳された？』

「洗脳なんかされていない。僕は僕の意志で……！」

もう戦う必要などないと父さんは言ってくれた。それなのにあの日グレンダイザーに乗ったのは、甲児の危機を見過ごせなかったからだ。牧場での平和な暮らしを守りたかつたからだ。

『そもそも国民を皆殺しにされていなければ仇討ちなど必要なかった筈だ。民を見殺しにして一人で逃げた王など王失格だ。今更こんな星の住民を救うなら、なぜあの時自国の民を守らなかつたのだ？』

「何だとっ！」

ハーケンを腰だめに構えてジガジガに体当たりする。難なく躲したジガジガが、後ろ足でダイザーの背中を蹴りつけた。ダイザーはバランスを崩してスペイザーから落ちかけ、左手でスペイザーの翼を掴んだまま距離をとった。

『俺はベガ星連合軍に加わることを決めた。国民も連合軍兵士となったが、滅ぼされてはいないぞ。王としては俺の方が正しい』

フリード星を脱出してから片時も忘れることのない民を失ったという喪失感に、モルスの冷え冷え

とした言葉が追い打ちをかけた。

「違う！ それは違う！」

我を忘れてフットペダルを踏み込む。ダイザーの胸から七色の反重力ストームの光が迸った。ジガジガの羽をかすめて光線は空へと吸い込まれる。

「兵士とはいっても奴隷扱いのはずだ。ベガ大王の命令一つでいつでも殺される。それで生きていると言えるのか！」

反重力ストームを左右に躲しながら、スペイザーの下に潜り込んだジガジガが、今度はスペイザーの後部を角で突き上げた。前に投げ出されたダイザーがスペイザーから転がり落ちる。

『現実を見る、デューク。死んでしまえばそれで終わりだ。だが、俺の国の民は今現在生きている。国民の生命を守れなかったお前は王の責任を果たせなかった。グレンダイザーがあれば地球を捨てて新しい星を探しに行けるだろう。もう戦う理由など何もないはずだ』

地球に逃れて来た時、もう二度とグレンダイザーには乗りたくないと思つた理由をかつての親友から突きつけられて、デュークは何も言えなかった。

逆さまになって落下を始めたダイザーの下にスペイザーが潜り込む。軽くスペイザーに左手を突き、ダ

イザーがスペイザーの上で立ち上がった。ハーケンを構え直す余裕を与えず、ジガジガが横から突っ込んできた。姿勢を崩して落ちそうになると、すぐさま反対側から角が突き込まれる。

『俺はここにベガ大王の王国を作るのだ。王の資格を失つたお前はさっさと立ち去れ』

操縦桿を握つていても、操縦席から飛び出しそうになる衝撃の連続に、デュークは翻弄され続けた。体を支えようと力を込めると、ダイザーが予期しない方向に動いてしまい、姿勢を立て直すこともできない。ジガジガの帯びている強いベガトロン放射能の影響で、デュークの右腕は千切れそうに痛む。片手でスペイザーにつかまつて、ぐったりとぶら下がったグレンダイザーに向かって、胸の角を高速で回転させながらジガジガが疾つた。

『昔の親友だからつて、手加減してるんじゃないだろうな！』

衝撃の度に受けるGと、腕の傷の激痛で、気が遠くなりかけたデュークの耳に甲児の声が聞こえた。そんなことはない、と答えようとしたが言葉にならない。ダイザーはスペイザーから手を離し、落下を始めていた。

『ダブルミサイル！』

ダブルスパイザーがミサイルを放った。ジガジガの頭に、羽に、胴体に次々と命中して爆発する。炎と煙を身にまとって、ジガジガが降下してゆく。爆発が終わって現れた姿には傷一つない。

「甲児……くん……無理だ」

途切れそうになる意識をどうにかつなぎ止めて、デュークは左手で操縦桿を握った。右手の感覚は既に無い。戦っている間に移動していたらしく、落下していく先は海ではなく、海岸に近い草原だった。地面に激突する寸前に何とか減速し、激突は免れた。それでも着地の衝撃がかかり、背中を強打して息が詰まる。涙でかすんだ視界の向こうに、上からまつすぐ突っ込んでくるジガジガが見えた。反射的にフットペダルを踏み、反重力ストームでジガジガをはじき飛ばした。上空で錐揉みしたまま墜落するかに見えたジガジガは、地面に落ちる寸前、翼を開くと、ふわり、と降り立った。胸の角を回転させながら大地を駆け、グレンダイザーの上に立つ。角の先端から放たれたベガトロン放射能のビームが操縦席を直撃した。右腕の痛みにデュークはもがき、左手で痛む腕を掴み、力余って戦闘服を引き破った。ビームがさらに赤く輝く。デュークは声も上げられず、身動きもできずに気を失った。

『敗残者に用はない』

どこまでも暗い眼窩で操縦席をのぞき込み、動かなくなったデュークの姿に向かって冷たく言い放つ声を残して、ジガジガは翼を広げて飛び去った。

● PHASE 10 宇宙科学研究所・観測室

メインスクリーン越しに、ゾンビのようなベガ獣ジガジガのビームを受けたきり動かなくなったグレンダイザーの姿が見えている。戦っている間の通信は、研究所でも傍受していた。ベガトロン放射能を大量に浴びるとベガ獣でさえも、骨の見えた屍のような姿になるのか。半身の皮膚と筋肉を崩壊させ骨まで見せた状態で死んだ子犬とジガジガの姿が重なり、大介もいざれそうなるという恐怖から、宇宙は夢中でマイクを取り上げた。

「大介、応答しろ、大介！」

背筋に冷たいものを感じながら呼び続けた。

墓場から蘇ってきたような姿のジガジガから放たれたビームの色は、ベガトロン特有の禍々しい赤色だった。昨日考えたことが当たっていたら、大介の腕は治療の前と変わらないほど傷口が拡がってしまったはずだ。その傷が大きい分だけ痛みも激しいに違

いない。

「甲児君、大介の様子はどうなんだ？」

『今着陸して見てください』

甲児が応答してきた。グレンダイザーのキャノピーが耐えてくれればいいが、と祈る気持ちになった。これまでの戦いでは、物理的な衝撃もベガトロン放射能もかなり防いでいた。だが、ジガジガのベガトロンビームは桁違いに強かった。防ぎきれず大量に浴びてしまつたら、ベガトロンの体に取り込んだ大介にとっては直ちに命の危険がある。

『所長、大介さんは気を失つてるみたいだ。呼んでも答えないんだ。それに腕のあたりが……』

『ジガジガは東京に向かっています』

リーダー担当の林が報告する。所員たちの目が自分に集中するのを感じ、宇門はマイクを握りしめた。

「ひかるさん、マリアちゃん、グレンダイザーを上空から護衛するんだ。甲児君は大至急戻つて来てくれ」

『了解』と、ひかるとマリアが同時に答えた声に重なって『えっ?』と甲児が聞き返してくる。

「大介には応急手当が必要だ。道具を取りに一度研究所に戻って欲しい」

『わかりました』

歯切れのよい甲児の返事を合図に、宇門はマイクを

置いて立ち上がった。

「ジガジガはどうするんです？」

ダブルスパイザーで全く歯が立たず、グレンダイザーすら苦戦するような相手に、スパイザーが三機東になってかかってもかなうはずがない。デュークに頼んで何とかしてもらうしかないことはわかりきっていた。だが、倒れたデュークにそれを求めるのはあまりにも過酷すぎ、第一、戦える状態かどうかもわからない以上、佐伯の問いに宇門は正面から答えることができなかった。

「大介の治療が先だ！各自持ち場を離れるな」

今は考えても仕方がない。できることから先にやるしかない。言い放つて宇門は観測室から駆けだした。

● PHASE 11 草原

ダブルスパイザーの後部補助シートに救急キットと光線治療器を抱えて乗り込んだ宇門は、身動きもままならないままグレンダイザーのところまで運ばれることになった。とにかく急がなければならなかったから、壊れやすい治療器を丁寧に梱包する時間などない。結局、大きめのバッグに入れたまま両手で抱

え込んで、全身をクッション代わりにして離着陸のショックを和らげるしかなかった。

ホバーの音とともに軽い着地のショックが伝わってきた。

「エンジンを止めるな」

念のため出した指示に、甲児が頷く。「開けますよ、所長」という甲児の声とともに座席が後ろにスライドし、足下が両側に開いた。昇降用のリフトが見えている。宇門はバッグを抱えたまま立ち上がった。リフトで降り、ダブルスパイザーの外部装甲に作り付けられている階段を下りると、草原にグレンダイザーが仰向けに倒れているのが目に入った。上空を、マリンスパイザーとダブルスパイザーが旋回している。

バッグをグレンダイザーの脇に置き、宇門は、甲児とともにグレンダイザーの頭部によじ登った。キャノピーの奥に、倒れているデュークの姿が見えた。右腕の傷の上の部分は戦闘服が破れて、当てておいたパッドも半分剥がれ、血で濡れていた。

「大介、大介！」

力の限りキャノピーを叩いた。甲児も一緒に、透明なキャノピーを叩きながら呼び続ける。デュークの戦闘服姿の胸は上下している。死んでは居ないことを確認し、甲児と顔を見合わせた。張り詰めた空気が

緩む。だがキャノピーが閉まっている限り、救助も手当もできない。

操縦者が人事不省に陥って、外部からの救助が必要な状態になれば、グレンダイザーの方で判断してキャノピーを開けることがある。かつてデュークを救助したときのグレンダイザーがそうだった。が、いつまで待てばグレンダイザーがその判断をするかがわからない。外部にキャノピーの開閉スイッチが無い以上、さしあたりデュークに意識を取り戻して開けてもらうしかなかった。

呼び続けて五分以上が経過した。デュークの手がわずかに動き、操縦桿のリングに通した左手首の先のスイッチに触れた。モーターの動く音とともにキャノピーが開いた。甲児が操縦席の中に入り、両脇に手を回して、デュークを立たせるようにして抱き上げた。宇門は、後ろからデュークの胴体を抱き、操縦席の外に引っ張り出した。甲児と二人でデュークを支えて、グレンダイザーの脇にそっと降ろした。

「甲児くん、シートを広げてくれ。それから、ダブルスパイザーから延長コードを……」

甲児がバッグからシートを取りだして広げた。宇門は、デュークをその上にそっと横向けに寝かせた。ヘルメットのバイザーを上げる。冷や汗に濡れた蒼

白な顔が現れた。傷を抑えていたパッドを取り去ると、上腕部から肩にかけて、えぐられ潰されたような大きな傷が現れた。光線治療器を取り出し、甲児がダブルスベイザーから引つ張った延長コードに接続し、スイツチを入れる。

「所長、大介さんは……」

「傷がひどく悪くなっている。とりあえず痛みだけでも抑えないと」

昨日の夜、光線治療である程度回復していた組織が崩壊していた。やはり予想が当たったか、と苦い思いで、青く光る光線を傷口に照射した。

「救急キットから消毒薬を出して傷口を洗ってくれ」

両手で光線治療器を持ったまま、甲児に呼びかけた。甲児が慌てて樹脂製のボトルの蓋を取り、容器のノズルを向けた。

「大介さん、こりや痛そうだ」

顔をしかめて甲児が身震いする。

「大介は戦いの途中でパッドを外して傷に直接触ってしまった。今は感染症の方が恐い。さっさとやるんだ」

有無を言わさぬ宇門の命令に、甲児は樹脂製の容器を押した。粒の大きい液体が噴霧され、傷口を塗らしていく。薬が滲みなのか、「うつ」と小さな呻きと

もに大介が目を開けた。

「父さん……」

「動いてはいけない。応急手当の最中だ」

起きようとすると大介の肩を押しとどめ、宇門は光線治療器を置いた。バッグから手袋を取り出して消毒薬で滅菌、傷を塞ぐためのパッドを取り出して封を切った。傷口を被い、幅の広いテープで巻いて固定する。

「痛みは？」

バッグのケースから、宇門は、小さな試薬瓶を取り出した。透明なガラス瓶で、シリコンゴムの蓋がはまっており、瓶の口の周囲はアルミシールされている。針付のデイスボーザブルシリンジを取りだし、中の液体を吸い上げた。

「父さん、もしかしてそれは昨日の……だったら今は使わないでください。痛みはだいぶ楽になるけど、ひどく眠くなってしまう」

「いや、これは違う。昨日の夜、佐伯君に頼んで作ってもらったものだ」

昨日、大介に使ったのは、アヘンアルカロイドから作った鎮痛剤のオピオイドだった。地球人に対しては強い薬だったが、フリード星人にはそれほどでもないそうだった。テトラカインやリドカインなどの局所

麻酔薬は、傷ができたときに最初に試してみても効果が無いことがわかつている。フリード星人と地球人では、見た目は似ていても分子レベルで違っている部分がかかなりあつて、それが薬の効き方の違いとなつて表れてしまう。地球人の体の中にあるイオンチャンネルやレセプターを標的にする薬剤がフリード星人に効く保証は全く無く、逆に地球人にとってありふれた薬剤が劇薬になる可能性もある。充分に試験された地球人用の医薬品を使ったとしても、フリード星人にとってはぶつつけ本番で治療もろくにしていない薬を使われるのと大差ない。それならば、と、昨日はフリード星人に合わせた麻薬の構造の見当をつけ、合成を佐伯に頼んだのだつた。

手当をした傷の部分避けて、上腕部の後ろ側の筋肉に針を突き立てた。軽く力を入れ、大介が眉をしかめるのを見ながらゆつくりと液体を送り込んだ。地球上にはフリード星人はマリアとデュークしか居ないので、治療のために薬を使う度にそれが動物実験と化すのもやむを得ないのだ、と自分自身を納得させる。特に意識せずとも迷いのない自分の手つきを見ながら、随分慣れたものだと思ふ呆れ、治療といいつつ実験台にしている大介に対して後ろめたさを感じ、針を引き抜いた後、宇門は、大介から目をそらし

た。

「これでいい」

光線治療器と救急キットをバッグにいれて片付けながら、宇門は、治療の効果を確かめるつもりで大介の表情を覗つた。瀕死の状態で地球に不時着した頃のように暗い表情で、青い瞳には何の力も宿つてはいなかった。

「父さん、僕は間違つていたのでしようか」

ゆつくりと大介が体を起こす。その左肩を支えながら、やはり、という思いで胸が痛んだ。戦いの間の通信は宇門も全て聞いていた。地球に逃れた後、幾度となく大介がうなされた原因を、同じ立場の王子として、モルスは容赦なく突いてきた。

「ベガ星による征服を受け入れていれば、フリード星人は皆殺しにされずに済んだんです！」

「間違えるも何も、それはお前のせいではない！ 中立を貫き、ベガ星連合軍に敵対も降伏もしない道を選んだのはお前の父、フリード王だ。王子のお前に決定権は無かつた筈だ。権限が無かつた者の責任など誰も問わない」

慰めるかわりに、畳み掛けるように事実を突きつける。

「それは、グレンダイザーがあればフリード星を守れ

ると思ったからで」

「そこまでフリード王は間抜けではない。ベガ星連合軍は、ベガトロン爆弾を埋め込んだ小動物で混乱を引き起こし、その隙に接近して制空権を取って陸戦部隊を送り込んでグレンダイザーを探し、逃げられたとわかると、大量のミサイルを四方八方から撃ち込んで星一つ丸ごとベガトロン爆弾で焼き尽くした。王宮近辺の円盤獣だけならまだしも、動物による攻撃も、同時多発のミサイル攻撃も、グレンダイザー一機でどうなるものでもなかったはずだし、そういつた攻撃方法があることくらいは予測していたはずだ」

「モール星の人は、ベガ星連合軍の兵士となつて生き延びていると……フリード星人はもう手遅れだけど、地球人は降伏すれば、命だけは助かるかもしれない」

モルスの言葉がよほど深く心を抉つたのだ。そうでなければ大介が、いや、一国を統べるはずの人物が降伏すれば助かる、などと考えるはずがない。ただ、もし大介が、これ以上戦いたくないという思いでこの言葉を口にしてるとすれば、地球人が助からないことを伝えれば、暗に戦いに追いやることになる。それでもここは説明するしかないだろう、と腹を括る。

「降伏しても地球人類は皆殺しにされる。今回は、親

衛隊員の中から腕利きを一人寄越したというのではなく、親衛隊長が出てきた。親衛隊長というのは、ベガ大王の近衛の総責任者ではないのかね。戦争の時は常にベガ大王の側で護衛する部隊を率いているはずだ。それが最前線に出てきて『ベガ星の爆発』があつたと言ひ、『地球にベガ大王の王国を作る』と宣言したのだから、今行われているのはベガ大王の親征、それも地球移住計画によるものに違いない。母星を失つたベガ星の連中が欲しがっているのはこの地球という星だけであつて、地球人類ではない」

言い終わつたと同時に、研究所から呼び出された。右腕の通信機が点滅し、小さな電子音を鳴らす。

『ジガジガが東京を攻撃しています。暴れ回つていてもう手がつけれません』

「そうか」

一言だけ応答し、宇宙門は、バッグを持つて立ち上がった。

操縦者の居ない円盤獣にフリード星人の脳が使われる場合があることはナイーダから聞かされていた。しかし、地球人が誘拐されてベガ獣にその脳が使われるということは無かつた。地球人がベガ星の侵略の手先として使われる時は、洗脳されるか、特殊な銃で撃たれて外見をそのままに乗っ取られるかのどちら

かだった。おそらく、ベガ星連合軍にとつて、地球人類は、侵略の武器の部品としても使えず、生かしておくメリットは無いのだろう。

戦つてくれと頼むこともせず、無言のまま、デュークの判断に任せるといふのは卑怯ではないかと自問した。最初に差し出すのが自分の命なら、とつくにそう頼んでいる。が、息子の命を先に危険にさらすのは性分に合わない。いっそ、職業軍人と部下の關係なら冷静に作戦指令も出せるものを、と次の言葉を選ばないままその場で立ちすくんだ。

「モルスを……倒します。親衛隊長が出てきたということは、もうベガ星連合軍にも派遣できるコマンドーが残っていないに違いありません。それに、腕だつてこうやって動かせるようになった」

大介が差し出した右手を、宇門は左手でそつと握りしめた。暖かい。この腕をいずれば切り落とすのか、と思うと、握る手が震えた。

「痛みを感じないからといって治つたわけではない。ベガトロン放射能を浴びれば今手当した部分もまた悪化するぞ。傷が良くなるまで安静にしているもらいたい……。行くのか、どうしても」

戦いに向けて背中を押しているながら父親面して心配するのはどう考えても矛盾している。だが、行かな

いで欲しいというのもまた、宇門の偽らざる気持ちだった。

ヘルメットのバイザーを下げ、デュークは無言で鎮くと、宇門が握っている手を静かに離してグレンダイザーに向かつて歩き出した。軽くジャンプして操縦席に飛び込み、キャノピーを閉める。倒れていたグレンダイザーがその巨体を起こした。不時着していたスベイザーがふわり、と舞い上がる。

「止めないんですか、所長」

延長コードをダブルスベイザーに収納した甲児が、シートを畳み始める。

「ダブルスベイザーで私とこの機材を運んでくれ。葉もまだ残っている。今はただ……でできるだけ近くに居てやりたい」

もう止めても意味が無いのだ、と答える代わりに甲児に仕事を命じ、ダブルスベイザーに向かった。降りている階段を上り、リフトで後部座席へと上がる。

ベガ星連合軍の目的が版図を拡大することではなくて移住ならば、戦いに負ければ人類は滅亡する。人類の科学力ではどうあがいてもベガ星連合軍には勝てない。かといって、地球を捨てて逃げようにも、人間一人を太陽系外に脱出させる技術すらなく、他の恒星系にたどり着くのはまず不可能だ。これまでは

デュークが戦ってくれたが、これは運が良かったからで、もし、デュークが地球ではなく他のどこかの星に不時着していたら、ベガ星連合軍の最初の攻撃で人類は滅んでいた。では、これまでが幸運だっただけだとして、人類が滅ぶ運命を受け入れ、デュークだけを今から逃がしたらどうか。デュークはしばらくは生きていけるだろう。だが、戦いでベガトロン放射能に晒されるのが無くなったとしても、あの腕の傷ではそう長くは保つまい。フリード星を脱出してから三年程さまよっても地球しか安全に暮らせる星が見つからなかつたという事は、地球の近くに生物が生存可能な星が無いことを意味する。地球にベガ星連合軍が居座るなら、相当遠くへ逃げない限りデュークにとつて安全とはいえないが、逃げ切るまでは生きていられないだろう。先に腕を切断して逃がした場合、傷も治らないうちに厳しい宇宙で一人で片腕だけで生き延びなければならず、生存の可能性は大幅に下がる。一方、今戦つてデュークが勝ち続ければ、ベガ星連合軍は撃退できるかもしれない。しかし、腕の傷を完治させないかぎりデュークは遠からず死ぬことになる。

「ここから先は時間との闘いになる」

ダブルスベイザーの後部座席で、誰に言うともなく

つぶやく。

腕を切断しなければならなくなる前にデュークがベガ星連合軍を撃破した場合にのみ、人類もデュークも一応は生き延びられる。右腕を失つたデュークはこの後もずっと、宇門源蔵の息子大介として研究所で穏やかに暮らしていけるだろう。

「何ですか、所長」

「もし、大介が右腕を失つても親友で居てやつてほしい」

ダブルスベイザーを離陸させている甲児に、頭を下げて頼み込む。

「勿論ですよ、所長。でも……見た感じ、ひどい傷だったけど、そんなに悪いんですか。もし、あのとき俺が無茶しなければ、大介さんは腕を怪我することもなかつたのに……」

大介の傷が悪化したのは、悪天候の中で新円盤の試験飛行を焦つた甲児を、発射台の崩壊からかばつて、ベガトロン放射能の古傷に、崩れてきた発射台の柱の直撃を受けたことがきっかけだった。

「甲児君、そのことで自分を責めるのはやめなさい。大介は若くて体力があつたから、ベガトロンの入り込んだ傷を一時的には抑えはてていた。しかし、抵抗力が弱まつたり体力が落ちたりすると、ベガトロンの影響

の方が勝って、いずれは今のような炎症を起こして傷が広がっていっただろう。傷が広がるかどうかは、傷口に入り込んだベガトロンの量と、本人の体力の勝負の結果だ。最初にベガトロンの傷を受けた時の条件が、その後どうなるかを全て決定してしまうのだ。治療のために随分実験を重ねてきたが、やればやるほどベガトロンというのは厄介な代物だということがわかってきた」

「こんなものをエネルギー源や武器に使うことを決めた科学者連中の顔が見たい、と、苦々しい思いで、地面が遠ざかっていくのを見つめる。ついでに、目の前で操縦桿を握っているのが、無公害エネルギー光子力を開発した兜十蔵の孫だということを不意に思い出し、皮肉なものだ、とため息をついた。

「所長、指示を」

「デュークを援護しろ。私にはかまわず存分にやれ。もしまた怪我がひどくなったら、その場でできる限りのことはするが、私ができなくなった場合は、頼むぞ、甲児君」

エンジンの出力が上がリ、振動と音が伝わってくる。開発中に何度も聞いたノーマルエンジン音を確認した。フライトスーツも着ないでダブルスピーザーに振り回されれば確実に失神するだろう。無様

な姿をさらすことになりそうだが、それでも、あの傷で戦うデュークよりは苦痛は少ないはずだ、と、宇門は覚悟を決めた。

● PHASE 12 東京

ジガジガは、東京湾から上陸し、海岸の工場や倉庫を破壊しながら、陸へと向かっていた。後の撤去作業を楽にするという目的で、建物全てを灰燼に帰す徹底的な破壊が行われ、原型をとどめているものは何一つ無い。至る所から火の手と煙が上がリ、先が見えない。リーダーで探ったが、ジガジガは地上に降りていくらしく、反応は無かった。

「こちらデューク。ジガジガがどこに居るかわかりますか」

自分が気を失っている間も、研究所はジガジガの居場所をモニターしているはずだ。それなら現在位置を知っているに違いない。

『こちらのリーダーにも反応がない。衛星画像の差分から割り出してみる……今地図を送った』

操縦席のリーダースクリーンに、東京の地図とジガジガの居場所を示す光点が三つ表示された。

『時間差をおいて撮影した衛星画像を重ねて、破壊の

拡がりの早いところから割り出した。熱源を調べているから煙の影響はない。ただ、延焼が烈しい地区があつて、一つに絞り込めない』

通信してきたのは林だった。とりあえず、一番近い光点へと向かう。様子を見ながら上空を通過したとき、下から火球がふくれあがつた。爆発の衝撃でグレンダイザーが揺れる。ビル街を道路にそつて駆け抜けた衝撃波が、窓硝子をことごとく粉碎し、ガラスの雨を地上に降り注がせた。風圧で割れたガラスの一部はビルの内部を飛び回り、逃げ遅れた人々の皮膚を切り裂いた。上昇してさらに旋回するが、ジガジガの姿は見えない。

『デューク、そのあたりはインテリジェントビルが集まっている地区だ。停電に備えて自家発電装置を備えている。その燃料が誘爆して被害が広がっているんだ。たつた今、別の映像が撮影できた。これで確定だ。ジガジガは東京駅付近に居る』

今度は、光点が一つになった映像がレーダースクリーンに表示された。操縦桿を握つて、示された光点に向かつて飛ぶ。破壊された地区と無傷な地区の境で、ジガジガが立っていた。

ジガジガの胸の角が高速で回転すると、ベガトロンの特有の赤い光を放ち始める。そのまま、ベガトロ

ビームを発射しながら嘶くように上半身をひねると、何の抵抗も遅れもなくビームが建物を貫きながら切り裂いていった。急激な温度上昇でコンクリートに亀裂が入り、鉄骨が融け、自重を支えきれなくなったビルが時間差をおいて倒壊していく。同時に、高温のガスとビームが、ビルの中の家具も人も瞬時に炎上させた。道路を走り逃げ惑う車は、燃料のガソリンを爆発させながら、高温で焼かれて金属が蒸発し、運転手は肉も骨も残さず消え失せた。フリード星最後の日が目の前に蘇り、デュークは堪らず叫んでいた。

「モルス！ 破壊をやめる」

ビームの放射を止めたジガジガが上空を仰ぎ見る。「ダイザー・ゴー」のかけ声とともに、デュークは分離レバーを引いた。スペイザーと合体したときに操縦席を移動させないままにしておいたから、即座に分離し、ダイザーはジガジガの正面に降り立った。

『では、決着をつけるまでだ。ここにベガ大王の王国を作れば、モルスの安全は保証されるのだ！』

何の予備動作もなくジガジガが地面を蹴つて踏み込んでくる。差し出したダイザーの両手が、ジガジガの巨大な角をつかんだ。ベガトロンのビームの放射は角の先端からだ。まずい、と思ったデュークは、操縦桿を握り、ダイザーを後退させた。ステップを踏んで

押し込んでくる力を逃がしながら、街をこれ以上傷つけまいとして、既に破壊された右横へ飛ぶ。着地の衝撃で火の粉と煙が舞い上がった。

『デューク、なぜこの星に肩入れする？ ろくな科学力もないこの星がベガ星連合軍に出会ったのが不運だったのだ』

「言つたはずだ。この星は僕の第二の故郷だ」と

振り向いて角を突き出すジガジガに、拳を突き出してハンドビームを撃つ。角にはじかれたビームが翼に命中し、ジガジガが後退した。翼を拡げ、威嚇するポーズをとる。

『お前は自分の平和な生活を守りたいだけだ。国を守る俺の邪魔をするな！』

「違う！ 滅ぼして良い生き物なんか無い！ 僕はここで助けられて暮らす間に、宇宙へ向かう人々に出会った。地球人の技術が今僕たちに及ばなかったとしても、それはちよつと遅れているだけだ」

宇宙は、デュークを息子として遇する傍ら、今持っている技術を全て使つて宇宙の観測をし、探査機や宇宙ステーションを打ち上げて宇宙へと手を伸ばしていた。甲兎は、フリード星やベガ星に比べればオモチャのような技術であつたが、自分で円盤を作つて操縦者となり、ミニフォーと互角に戦つてきた。宇宙を飛ぶ技術

は未熟だったが、高性能な戦闘ロボットマジンガーZやグレートマジンガーを地球人の手で開発していた。いずれ彼らは太陽系を越え、恒星間を飛び、銀河を越えて行くだろう。

「その未来を……可能性を潰してはいけない！」

操縦桿の先のスイッチを押し込んだ。両肩からシオルダーブレイムが発射され、ジガジガの翼の付け根に命中し、フレームの一部を切断して飛び去つた。ジガジガはグレンダイザーを正面から見据え、胸の角を回転させた。まき散らされるベガトロン放射能で、ジガジガの全身がぼうつと赤い色を放つ。デュークは腕の痛みを堪えて、操縦桿のモードを切り替えた。左側の操縦桿でスペイザーを呼び戻し、ジガジガの背後から急降下させた。急降下の速度も加えて連発されたスピンドリルが、ジガジガの翼にいくつもの穴を穿ち、地面に突き刺さつた。

穿たれた翼の穴から液体が漏れだし、地面に落ち、散らばつた瓦礫を炎上させる。ジガジガは翼を動かさず、四つ足で立つたままの姿勢で地面から飛び立つた。

「翼は飛行には関係ないのか……。しかし燃料タンクはやつたか？」

口に出してはみたが、ベガ星にも重力を操る技術は

ある。本体が馬と同じ形状では、揚力を利用した飛行に適しているとはとてもいえず、翼に頼らず飛べるように作られているのは当たり前ではあった。

「ダイザージャンプ！」

地面を蹴ってダイザーが飛び上がる。落下を始める直前に下に回り込んだスペイザーが、ダイザーを載せたままジガジガの高度まで上昇した。入れ違いに、ダブルスペイザーが急降下し、直前までジガジガの居た場所を低空飛行で駆け抜け、再び機首を上げて上昇していった。

『デューク、聞こえるか。ジガジガの翼から漏れた液体にベガトロンの反応はない。液体は燃料ではなく、おそらくは冷媒だ。触れただけで物を炎上させるとは、恐るべき高温だが、冷却機能に異常が起きたジガジガは長時間は戦えない。全力で来るぞ』

荒い息とともに、宇宙の音が通信機から流れてくる。父さんも来てるのか、と思つた瞬間、ダイザーは、ジガジガの四肢に絡め取られたままスペイザーから引きはがされ、地面へと叩きつけられた。反重力ストームを使つて距離をとらなければやられる。フットペダルを踏むよりも先に、ジガジガの角からベガトロンのビームが放たれた。視界が赤く染まる。地面に押さえつけられたまま直撃を受けた、と思う間もな

く、右腕ごと吹き飛ばされたような衝撃を感じた。誰かが叫んでいる。それが自分の叫び声だと気付くと、右腕から痛みが全身を突き抜けるのが同時だった。左手で痛む右腕を握りしめる。右腕がみしり、ときしむ音を聞きながら、デュークは体を痙攣させた。操縦桿の向こうに突き出された右手が強ばり、自分の意志では動かせないままスイッチに触れた。

グレンダイザーの両肩から、シオルダーブローメンが発射された。目の前にあつたジガジガの首に向かつて二枚の半月状の刃が飛び、首を貫いて空に舞い上がる。首を半ばから刎ねられ、コントロールを失つたジガジガが姿勢を崩し、ベガトロンのビームがグレンダイザーから逸れた。

視野を圧倒していた赤い色が消えたことだけはわかつたが、痛みで目がくらんで体が思うように動かせない。左の操縦桿だけで操作されたダイザーは、上半身を起こしながら腹ばいになり、立ち上がろうとしてみんなのめつた。

「今、攻撃しなければ！」

シオルダーブローメンは戻っていない上、操縦桿一本ではダブルハーケンには振るえない。デュークは左手でスペースサンダーの発射ボタンを押し込んだ。グレンダイザーの頭部から稲妻のような熱線が迸る。

操縦桿から手を離してしまつたため、ダイザーの姿勢が制御できない。スペースサンダーを撃ちつばなしにして、ダイザーはそのまま前に倒れた。溢れるようなビームの束が、装甲のない首の切断面からジガジガを切り裂き、内部のメカニズムを誘爆させた。巨大な火球となって爆散するジガジガの破片を受け、ダイザーは飛ばされながら回転し、うつぶせになって瓦礫の上に叩き落とされた。

「デューク、大丈夫か。ジガジガの操縦者はまだ生きてるぞ」

甲児が一息で叫ぶ声が通信機越しに届いた。

「何だつて？」

腹ばいになつたままのグレンダイザーの操縦席からあたりを見回す。瓦礫の上に、切断されたジガジガの頭部が転がっていた。その暗い眼窩から、這い出してくる人影があつた。

「モルス！」

左手でキャノピーを開け、デュークは外に飛び出した。飛び降りた衝撃が右腕に響く。足場の悪い瓦礫をなんとか踏み分け、コンクリートの塊を蹴飛ばしながら、デュークはモルスに近づいていった。

切断されたジガジガの頭部から這い出したモルスは、瓦礫の上に仰向けに横たわっていた。

スパイザーが三機一緒に高度を下げてきた。下降気流が影響しない程度に距離をとって着陸態勢に入る。

「モルス……」

呼びかけるとモルスは目を開けた。起きようとするが動けない。戦闘服は血でぐっしりと湿り、横たわる地面にも赤い血が流れていた。デュークはその傍らに跪いた。

「俺の負けだ、デューク……」

腕の傷を認めたモルスが目を見開いた。

「その傷は、ベガトロンの傷だな？」

左手で右腕を押さえたままだったが、ベガトロンビームを浴びたショックで、宇門が貼り付けたパッドを剥がしてしまっていた。

「わかるのか？」

「ああ。モルル星の人達も、似たような傷で大勢が死んでいったからな」

「それはどういうことだ？ モルル星の人達は無事で
はなかつたのか」

思わず聞き返していた。モルスが口の端で自嘲するように笑う。

「ベガ大王に忠誠を誓つた結果、俺の星の男達はベガ星兵士にされて最前線に送られた。女や子供達は、ベ

ガトロンを掘り出すための鉱山で強制労働だ。国民は、最初は俺を恨んだが、それでも、フリード星の最後よりはましだと、最後には納得してくれた。俺は、こんな無茶な侵略が長くは続かないだろうと思っていた。いづれ力を蓄えて、モール星を再び独立させることができるはずだと。だから俺はベガ大王のために戦果を上げ続け、親衛隊員に抜擢された。先任の隊員がグレンダイザーと戦って破れたこともあって、とうとう俺は親衛隊長にまで昇進した。ベガ大王が地球を手に入れたあかつきには、モール星を独立させるという約束もとっていた」

「ベガ大王は約束を守らなかったのか」

あのベガ大王がまともに約束を守るとは思えない。だが、モルスの答えはデュークの予想を裏切った。

「違う。ベガトロンだ。兵器にもエネルギー源にも使われているベガトロンは、モール星人に深刻な健康被害を引き起こした。ちよつとした傷からベガトロンが入り込むと、治ったように見えても、再び炎症を起こし、皮膚も筋肉も剥がれ落ちて死んでしまう。デューク、お前の腕の傷のようにな。さらに、ベガトロンの影響を受けた女性からは子供が生まれなくなつた。生まれても奇形で、寿命が極端に短い。ベガ星の侵略を受け入れて一年が経過してからは、モール

星人の健康な子供はただの一人も生まれていないのだ」

「何だつて……」

「このままで二世代を経れば、モール星人は絶滅する。俺は必死になって治療法を探した。ベガトロンさえ分解できれば何とかなるはずだからな」

「成功したのか」

「ああ」

スパイザーから降りて、二人を遠巻きに見ていた宇宙門と甲兎、ひかる、マリアがそろって驚きの声をあげた。

「さすがだ……フリードの教授陣を唸らせるほど優秀だったからな、お前は」

モルスは、ホルスターから銃を引き抜いた。

「ベガトロンマイナス光線。この銃に組み込んである。ベガトロンそのものを分解して消し去るということは、ベガ星連合軍にとつてとてつもない脅威であり、反乱の意志ありと見なされる。だから、秘密裏に開発するしかなかったし、大型のものは作れなかった。第一、動かすのに莫大なエネルギーが必要だから、大型化は無理だ。武器に使えるほどの出力があれば、ベガ星連合軍を一気に無力化できるが、そうそう都合良くはいかないようだ」

デュークはモルスから銃を受け取った。何の変哲もない光線銃だが、十と一を切り替えるレバーが銃身に付いていた。

「これがあれば、ベガトロンに冒された人を助けられるのか」

「そのつもりで作ったのだが、問題がある。レバーをマイナスに合わせてその残骸を撃ってみろ」

デュークは、モルスの後方に横たわっているジガジガの残骸に向かって引き金を引いた。ビームが命中すると、ジガジガが白熱して輝いた。

「ベガトロンの消す時に、多量の熱を発生するんだ。ジガジガは濃いベガトロン放射能を帯びているから、今のように高温になる。ベガトロンに冒された人に使った場合は今ほどではないが、ベガトロンの量が多ければ、今度はやけどで死ぬことになる。デューク、その銃はお前にやる。ベガトロンの傷を治して、生き延びてくれ。そして、できればモール星の人達を……」

「モルス……それを言ってくれば、僕たちは戦わずに済んだものを」

「モール星の人達を人質にされているようなものだからな。俺が力及ばず戦死したのなら、人々はお目こぼしされて生き延びる機会もあるだろうが、俺がベガ大

王に逆らったら、見せしめのため即座に皆殺しにされてしまう。最初からこれしか無かったのさ。デューク、ひどい事を言っただけじゃなかった。たとえどんな姿でも今国民が生きている、そう自分に言い聞かせなければ、こんな戦いは続けられなかったのだ」

モルスの視線がデュークの後ろを泳ぐ。デュークもつられて後ろを見た。宇宙が、甲児に支えられて立っている。その脇で、ひかるとマリアが手を取り合っ、デュークとモルスを見守っていた。

「地球でも仲間にも恵まれたようだな」

「モルス、研究所で手当をしよう」

「無駄だ。俺の体は、ベガ星脱出の時に、大量にベガトロンを取り込んでしまった。その銃でも消し去るのは難しいだろう。それにこの傷だ。もう保たない」

モルスは静かに目を閉じた。

「モルス、今でも僕は君のことを親友だと思っている」
その言葉を使い終わる前に、モルスの体は溶け始めた。見る間に形を失い、骨も灰となって散り、後には何も残らなかつた。

● PHASE 13 宇宙科学研究所

大介を医務室に運び込み、従来通りの光線治療器と

消毒薬で手当してから、宇門は実験室にこもりきりになった。

モルスからもらった銃は、威力が強すぎる。大介の体の中に入っているベガトロンを一度に消し去れば、今度はまだ残っている腕の組織にやけどを負わせかねず、ベガトロン放射能が消えても腕を切断することになりかねない。

作業としては滅^{アッテネーター}衰器を作るだけだったのだが、元々の銃が地球人から見ればオーバーテクノロジーの産物である上、下手に分解して壊すわけにはいかない。極端に神経を使うリバースエンジンアリングを強いられ、それが時間との闘いになったため、宇門は、ほとんど眠る暇もなくなった。所員たちも、観測室に最低限の人員を残し、モルスの銃を治療器に改造する作業に追われた。作業が終わったのは、モルスと戦ってから一週間が経った後だった。

マイナス光線照射装置を作った後、宇門が最初に行ったのは、動物実験で効果を確認することだった。モルスを倒してからベガ星の攻撃は無かったたので、新しい被害は発生していなかった。しかし、以前の攻撃で被害を受けて死んだ小動物は冷凍保存してあったので試験は可能だった。それを使って、ベガトロンマイナス光線の放射で動物の体の中に含まれているベ

ガトロンが減っていくことと、そのときの発熱量が出力によってどう変わるかを記録した。

作業が終わった時には、夕方になっていた。宇門は、マイナス光線照射装置を医務室に運び込んだ。研究所の嘱託医が大介に付き添っていた。この医師の手当てもあつて、ずっと傷ができたままになっているにもかかわらず、感染症を起こさずに済んでいた。

傷を覆うパッドを一旦剥がし、マイナス光線照射装置を傷に向けて固定した。

「これが最後の実験だ。効いてくれ……」

祈りを込めてスイッチを入れる。傷の見た目は変化が無いが、傷の脇に置いて放射線を連続測定している装置の記録用のチャートは、じわじわとベガトロン放射能が減っていることを示していた。

変化の傾向まで見届けて、宇門は、大介のベッドの脇に座り込んだ。

「宇門所長、大丈夫ですか？」

嘱託医の呼びかけてくる声が遠い。

「大介の治療を計画通りに頼みます」

それだけ言うと、宇門は、壁によりかかってどうかこうにか歩きながら医務室を出た。

嘱託医への指示は、これまでの光線治療器とマイナス光線発生装置を交互に使い、ベガトロン放射能が無

くなつた後は光線治療器のみで治療する、というものだった。ベガトロン消滅に伴うダメージを最低限に抑えることを狙ったものだった。

医務室の入り口で、甲児、ひかる、マリアとすれ違った。

「所長、大介さんは……」

「多分完治するはずだ」

三人が慌てて医務室に走り込む足音を聞いて、「医務室では静かに」を徹底しておくのだった、と、とりとめもなく考えた。

瞬きして目を閉じるだけで意識が遠のく。気力だけで歩いて観測室に向かった。自動ドアから入ろうとしてよろめき、入り口で倒れた。そのまま眠りに落ちそうになる。

「所長、しっかりとしてください！」

林に揺り起こされて、宇門は、普段居る中央の席に向かつて手を伸ばした。察した林が宇門を助け起こし、椅子に座らせ、背もたれをリクライニングの位置に倒した。

「治療を開始した。大介は治るぞ」

それだけ伝えるのがやっとだった。もう眠りたい。

「やりましたね、所長！」

観測室メンバーが声を上げた。

治まらない頭痛と目眩と動悸息切れ、ついでに吐き気まで感じて、宇門は目を閉じ、それきり意識を手放した。

中央の席で眠りこけている宇門の横で、所員たちは祝杯を挙げていた。林が所長室からくすねてきた高級ブランデーを振る舞った。今日ぐらいいは仕事を放り出してもいいだろう、酒の方も林が事前にあらかじめ予告はしてあるわけだし、というのが所員の一致した意見だった。

— 完 —

参考資料

UFOロボ・グレンダイザー 71話シナリオ
悲劇の親衛隊長モルス 田村多津男

1 スカルムーン・大王室

指さして叫ぶベガ大王。

ベガ「見ろ！これが現在のベガ星だ！かつてわれわれの偉大な王国であったベガ星だ！」

見つめるガンダル指令とズリル長官。

スクリーンにとられているベガ星の終焉。

2 ベガ星

暗黒の宇宙――

黒の周囲に稲妻のようなスパークが無数に走る。

不気な鳴動、次々に爆発し暗黒の宇宙に飛散して崩壊していく星。

星全体が断末魔にうめきのたうちまわっているようだ。

ベガの声「ベガ星は間もなく暗黒の宇宙に跡形もなく消滅するだろう……！」

3 スカルムーン・大王室

かっとなガンダルとズリルを睨むベガ。

ベガ「われわれの王国はなくなったのだ！ 新しい王国を作らなければならない！ それは地球しかないのだ！」

ガンダル「それはよく分かっております！」

ベガ「いつまでこんな月の裏側に隠れていなければならぬのだ！」

ガンダル「ただ今総攻撃の準備をしております。今しばらくお待ちを！」

ベガ「急げ！一刻も早くあの地球にわれわれの

新しい王国を作るのだ！」

「はい！」

頭を下げるガンダルとズリル。

傷がまだ癒えていないズリル、それが痛んでうつと呻く。

ズリルの声「グレンダイザーめ！ グレンダイザーさえ倒せば！」

スクリーンを見つめているベガ

ベガ「ああ、我々の偉大な王国が……」

突然、ハツとなるベガ。

ベガ「なんだ、あれは！」

4 ベガ星

崩壊する星の地中から現われる一つの影、それは何か巨大な生物のようである。

ベガの声「あれはなんだ！」

ズリルの声「光波望遠鏡を拡大します！」

その影が大きくとらえられる。

巨大な翼を広げて飛び立ち、稲妻のようなスパークにうきだされたその姿は、全身白骨と化したベガ獣ジガジガである。

あっ！ その奇怪な姿にベガ・ガンダル・ズリルの驚愕の声。

断末魔の星から姿を現わしたジガジガ、それはまるでよみがえった死神だ。

5 タイトル

「最後の親衛隊長モルス！」

6 フリード星

その最後――

襲来する無数のベガ星円盤。

ベガトロン光線で次々に爆破されていくフリード王国。

爆発の中をつつ走るデューク・フリード。

急降下してくる円盤一機。

ベガトロン光線がデューク・フリードを襲う。

必死にかわすが、光線が右腕をかすめる。

デューク「あっ！」

7 宇宙科学研究所・大介の部屋（夜）

ハッとベッドに身体を起す大介。

右腕の痛みに、うっと呻いてそこをおさえる。

シャツをはだけて傷跡を見る。

赤い傷跡は二の腕から肩の方に拡がっている。

きつと見つめる大介。

大介の声「フリード星の最後のとき、ベガトロン放射能で受けた傷……！」

8 同・屋上（夜）

夜空に星がきらめく。

腕をおさえじつと夜空を見上げて立つ大介
大介の声「この傷が胸まで広がったとき、ぼくの命はない……その時まで、ベガ星軍を倒さなければ……！」

宇門が来て、大介の後姿を見つめる。

宇門「大介……」

大介「あ、お父さん……」

宇門「（側に来て）どうしたんだ」

大介「眠られなくて」

宇門「痛むのか、腕の傷が」

大介「え？、いえ……」

慌てておさえていた手をはなす。

大介「ベガ星軍のことを考えていたんです」

きつと夜空を見上げる。

大介「やつら、地球に基地を作ることを失敗したので、きつとどこかに集結して総攻撃の準備をしているに違いありません」

宇門「うん、最後の決戦は近いかもしれないな」

夜空を見上げて立つ二人。きらめく星――

9 宇宙空間

彼方から飛来するジガジガ、ぐんぐん迫ってくるその奇怪な姿。

10 スカルムーン・大王室

スクリーンに迫るジガジガ。

見つめるベガ。

ベガ「一直線にスカルムーンに向って来る、やつは一体何者なのだ！」

見つめるズリル。

アイパッチの開いた電子アイが烈しく明滅している。

ズリル「コンピュータ・ボイス」アレハ、ベガ獣ジガジガダ」

ベガ「なんだと！」

ズリルのアイパッチが閉じる。

ズリル「そうです、あれはベガ獣ジガジガです」

ベガ「ジガジガは、われわれがベガ星を脱出するのを見とどけたあと、爆発でやられたはずだ！」

ズリル「死んではいなかったのです！ よみがえったのです！」

ガンダル「それなら、親衛隊長モルスも生きているというのか！」

ズリル「大王さまのいるこのスカルムーンに真

直ぐに飛んで来る！ モルスも生きている証拠だ！」

11 同・中央広場

大王の車が走る。

上空から着地するジガジガ。

車が停まり降りたつベガ・ガンダル・ズリル。ジガジガ、平伏するように足を折り頭を下げる。

その頭蓋骨の眼窩から飛び降りる一人の男。髪は老人のように真白だが、顔はまだ青年

(デューク・フリードと同年輩)の親衛隊長モルスである。

モルス「大王さま！」

ベガ「生きていたのか、モルス！」

モルス「はい、新しいベガ王国を見とどけるまでは、このモルス死にはいたしません！」

ベガ「モルス、頼んだぞ！」

モルス「はい、必ず地球に新しいベガ王国を作つてみせます！」

きつと彼方を睨むモルス。

12 宇宙科学研究所・観測室

宇門の前に立つ大介・甲児・ひかる・マリア。

宇門「各国の国防軍も非常警戒体制に入ったが、

- できることなら一機も地上に潜入させたくない！ 今まで以上に厳しくパトロールしてほしい！」
- 大介「はい！ 出動だ！」
- 大介を先頭にダツと駆け出す甲児・ひかる・マリア。
- 13 同・廊下
駆ける大介。
避難口にとびこむ。
- 14 同・格納庫への通路
移動車でつき進む大介。
- 15 同・グレンダイザー格納庫
移動車からとび出す大介。
大介「デュークフリード！」
デュークフリードに変身、グレンダイザーの操縦席にとび乗る。
- 16 同・グレンダイザー発着場
降下して来るグレンダイザー。
宇門の声「ルート・ワン・OK！」
ゲートに発進ランプがつく。
デューク「グレンダイザー・ゴー！」
グレンダイザー、発進。
- 17 同・スベイザー格納庫

-
- カプセルからとび出して、各々スベイザーに乗りこむ甲児・ひかる・マリア。
- 甲児「ダブルスベイザー・スタンバイOK！」
ひかる「マリンスベイザー・スタンバイOK！」
マリア「ドリルスベイザー・スタンバイOK！」
- 18 同・ルートワン
つき進むグレンダイザー。
- 19 同・発射塔
シャッターが開いて発射塔がせり上る。
甲児「ダブルスベイザー・ゴー！」
ひかる「マリンスベイザー・ゴー！」
マリア「ドリルスベイザー・ゴー！」
発進するスベイザー三機。
- 20 空
旋回するスベイザー三機。
飛来するグレンダイザー。
- 21 グレンダイザー・操縦席
デューク「各機分担してパトロールする！ 担当区域は打合わせ通り！ 一機も地上に潜入させるな、空中で撃破するんだ！」
- 22 空
四方に分れて上昇していくグレンダイザーとスベイザー三機。

23 月裏面・砂漠地帯

不気味な眼窩を暗黒の宇宙空間に向けているジガジガ。

側に立つモルス・ガンダル・ズリル。

モルス、手を上げて合図。

ジガジガの胸からつき出た巨大な角が真赤に燃えて回転し、そこから強烈なベガトロン光線が発射される。

はるか彼方に一つの小惑星。

それにベガトロン光線が照射された瞬間、さまざまな閃光と共に跡形もなく消滅する。

ガンダル「すごい！　すごいベガトロン光線だ！」
ズリル「そうか、ベガ星の爆発で地中に埋もれながら、ベガトロン・エネルギーを吸収してよみがえったのか！」

モルス「前よりも強力なベガ獣としてよみがえったのです！」

ガンダル「最強のベガ獣だ！　これならグレンダイザーを倒せる！」

ズリル「地球征服のために今までさまざまな作戦をたてて来た。だが、その最後の作戦はただ一つ、グレンダイザーを倒すことだ！」

ガンダル「グレンダイザー！　われわれの邪魔を

するのはやつだけなんだ！」

モルス「親衛隊長として、このモルスが必ずグレンダイザーを倒します！　たとえ刺し違えても必ず、必ずこの手で！」

ジガジガもモルスと同じ決意を示すように頭蓋骨の口を開け、奇怪な声で暗黒の宇宙に向って吼える。

24 宇宙科学研究所・観測室

拡大されたレーダー・スクリーンの四方に四つの光点。

見つめて立つ宇門。

声「こちらグレンダイザー！」

一つの光点――

25 飛ぶグレンダイザー

26 グレンダイザー・操縦席

デューク「第一区域、異状なし！」

27 飛ぶマリンスペイザー

28 マリンスペイザー・操縦席

ひかる「こちらマリンスペイザー！　第二区域、

異状ありません！」

29 飛ぶドリルスペイザー

30 ドリルスペイザー・操縦席

マリア「こちらドリルスペイザー！　第三区域、

異状ないわ！」

31 飛ぶダブルスパイザー

32 ダブルスパイザー・操縦席

甲児「こちらダブルスパイザー！ 第四区域、異状なし……」
うつと上空を見る。

なにかが大気圏に突入、パツと燃え上る。

甲児「あれは！（慌てて）異状なしじゃない！ただ今、なにかが大気圏に突入した！」

きつと睨む。

それは円盤状のカプセル、真赤になって落下して来る。

甲児「円盤だ！ やつらだ！」

33 グレンダイザー・操縦席

デューク「甲児君、直ぐにいく！ ひかるさん、マリアはパトロールをつづけろ！」

34 空

グレンダイザー、フルスピードで一方に飛ぶ。

35 宇宙科学研究所・観測室

宇門「第四区域に円盤出現！ 地上の国防軍に緊急連絡！」

無線機の前に坐っている所員。

所員「こちら宇宙科学研究所！ こちら宇宙科学研究所……！」

他の所員たちも緊張した顔で各々の計器をきつと見つめている。

36 ダブルスパイザー・操縦席

甲児、きつと見る。

上空からぐんぐん降下してくる円盤。

甲児「くそつ！ 絶対に潜入させないぞ！」

ぐつと操縦レバーを握る。

37 空

円盤に向って急上昇していくダブルスパイザー。

甲児の声「サイクロン・ビーム！」

ビームを照射するが、びくともしない円盤、ぐんぐん降下していく。

甲児の声「この野郎！」

旋回して、急降下で追いつがるダブルスパイザー。

甲児の声「サイクロン・ビーム！」

なおもビームを照射するが、ダブルスパイザーなど気にも止めないようにぐんぐん降下していく。

飛来するグレンダイザー。

甲児の声「あ、デューク！」

デュークの声「よし！」

円盤目がけて急降下するグレンダイザー。

デュークの声「スペース・サンダー！」

スペース・サンダーを照射。

と、二つに割れてとぶ円盤状のカプセル。

中から姿を現わすジガジガ。

38 ダブルスペース・操縦席

その奇怪な姿に仰天する甲児。

甲児「な、なんだい！ ベガ獣の骸骨だ！」

39 空

悠々と翼をはばたきながらグレンダイザー

をその不気味な眼窩で見すえるジガジガ。

40 ジガジガ・操縦席

モルス「デュークフリード、待っていたぞ。おれ

たちの勝負に決着をつける時をな！」

41 グレンダイザー・操縦席

あつとなるデューク。

デューク「その声は、モルス……」

× × (CM) × ×

42 空

対峙するグレンダイザーとジガジガ。

43 グレンダイザー・操縦席

デューク「その声は、モルス……モルス星の王子

のモルスか……！」

44 ジガジガ・操縦席

モルス「モール星はベガ星連合軍に加わった！

おれはベガ大王の親衛隊長だ！」

45 グレンダイザー・操縦席

デューク「モルス！ あれほどモール星の平和

を願っていたお前がベガ大王の配下になったと

は！」

46 ジガジガ・操縦席

モルス「モール星は小さくて貧しい星だ。ベガ星

連合軍に加わることがモール星の未来のために

なるんだ！」

47 グレンダイザー・操縦席

デューク「モルス……！」

暗然と言葉を呑むデューク。

甲児の声「デューク！ ベガ星の親衛隊長がデ

ュークの知ってるやつだったのかい！」

デューク「モルスがフリード星に留学生として来

ていた頃、ぼくたちは親友だった……」

甲児の声「へえ、親友……！」

48 ジガジガ・操縦席

モルス「今は敵だ！ 新しい王国を作るのを邪魔する憎むべき敵だ！ ゆくぞ、デュークフリード！」

49 空

突如、猛然と襲いかかるジガジガ。

不意をくらい、その胸の角の強烈な一撃に

ふつとぶグレンダイザー。

バランスを失って墜落。

50 ダブルスペイザー・操縦席

甲児「あつ！ デューク！」

グレンダイザーを追って急降下。

51 空

やつと体勢をたて直すグレンダイザー。

甲児の声「手強そうなやつだ！ 合体してやつつけちやおうぜ！」

52 グレンダイザー・操縦席

デューク「甲児君、モルスはぼく一人の手でやらせてくれ！」

甲児の声「デューク！」

デューク、答えずにぐつと操縦レバーを引く。

53 空

ジガジガ目がけて急上昇していくグレンダ

イザー。

54 グレンダイザー・操縦席

デューク「シュート・イン！」

座席が移動。

デューク「ダイザー・ゴー！」

55 空

スペイザーからとび出すグレンダイザー、一回転してスペイザーの上ですつくと立つ。

デュークの声「ダブル・ハーケン！」

ハーケンをしっかりと握りしめる。

デュークの声「ゆくぞ、モルス！」

きつと身構えるジガジガ。

モルスの声「おう、デューク！」

猛然と迫って来るジガジガ。

一直線につつこむグレンダイザー。

激突する両者。

ハーケンと角が火花を散らす――

56 フリード星（回想）

ぶつかり合うデュークとモルス。

美しい緑の草原。

彼方に平和なフリードの都。

とつくみ合う若い二人。

57 空

ハーケンと角で戦うグレンダイザーとジガジガ。

グレンダイザーがハーケンをふるう。

鋼鉄のような骨の足でがつきり受け、すかさず角で反撃してくるジガジガ。

両者の力と力の戦い——

58 フリード星（回想）

とつきみ合うデュークとモルス。

デューク、モルスを投げとばす。

直ぐに起き上がったモルスがデュークを投げろ。

二人、力つきて草原に寝転がる。

デューク「モルス、なかなかやるじゃないか！」

モルス「お前もなかなかやるよ、デューク！」

二人、声を上げて笑う。

59 空

互角のグレンダイザーとジガジガ。

とびはなれる両者。

お互いの呼吸をはかってゆつくり旋回しながら対峙。

60 グレンダイザー・操縦席

じつと見つめるデューク——

61 フリード星（回想）

並んで馬を走らせるデュークとモルス。モルスが抜く。

モルス「どうした、デューク」

デューク、抜き返す。

デューク「モルス、どうしたどうした！」

二人、懸命に馬を走らせていく。

× × ×

教室で机を並べているデュークとモルス。

真剣な表情で教授の講義を聴いている。

× × ×

宮殿の中庭。

ギターの合奏をしているデュークとモルス。

平和で美しい夜。

モルスの声「（鋭く）デューク！」

62 空

ジガジガ、不意に角から光線を射つ。

あつ！ かろうじてハーケンで受けるがよろめいてスペイザーから落下するグレンダイ

ザー。

スペイザー、そのあとを追って急降下。

下に来たスペイザーに受け止められる格好のグレンダイザー、がくつと片膝をつく。

63 ダブルスペイザー・操縦席

甲児「どうした、デューク！ 昔の友達なんで手加減してんのか！ なんだつたらおれがやつつけてやつてもいいぜ！」

64 空
きつと頭上を見上げるグレンダイザー。
デュークの声「反重力ストーム！」

ストームにまきこまれたジガジガ、骨がバラバラになつてとび散る。

65 グレンダイザー・操縦席
ハツと見るデューク。

デューク「モルス……！」

66 フリード星（回想）
空港。

一隅の物陰に追いつめられているモルスたち数人。

包囲しているフリード軍の兵士たち。
その中にデュークがいる。

デューク「モルス！ 無謀なことはやめろ！ モルス！」

モルスたち、拳銃を射つ。
兵士たちも射つ。

デューク「モルス……！」
悲しそうに見つめるデューク。

デュークの声「モルスの父親であるモール星の王が死んだ。新しい王は野心家で周囲の星を征服しようとする戦争を始めた。そのためにモール星の人民たちの平和な生活は崩れた。モルスはフリード王に保護されることになったが、彼はフリード星にいる同志と、フリード軍の円盤を強奪して脱出しようとした。新しい王を倒そうとするモルスの真意は分るが、中立を守るフリード星としては見逃すわけにはいかなかった……」

抵抗するモルスたち。

包囲をせばめていく兵士たち。

ついに拳銃を捨てて手を上げる男たち。

駆け寄るデューク。

だが、男たちの中にモルスの姿はない。

デューク、ハツと気づいて見る。

空港の外に走り去っていく一台のオートバイ。

デューク、駆ける。

そこにあるオートバイにとび乗ってあとを追う。

67 グレンダイザー・操縦席

デューク、じつと目を閉じている。

甲児の声「デューク、危ない！」

68 空

ハッと目を開けるデューク。

グレンダイザーの下から攻撃してくるジガジガ。

その角で突かれふつとぶグレンダイザー。

ダブルスパイザー、猛然とつっこでいく。

甲児の声「もう見ちゃいられない！ デューク、勝手にやらせてもらうぜ！ ダブル・ミサイル！」
グレンダイザーの下から攻撃してくるジガジガ。

ミサイルを射ちながらつつこんでいく。

スパイザーにつかまって墜落をまぬがれた

グレンダイザー、ハッと見る。

デュークの声「甲児君！」

ミサイルにびくともしないジガジガ。

ダブルスパイザー、苦戦、ジガジガの巨大な角に追いつめられていく。

スパイザーの上につきくと立つグレンダイザー。

デュークの声「スペース・サンダー！」

ジガジガ、スペースサンダーを翼に受けてた
まらず墜落。

69 草原

緑の草原に墜落して来るジガジガ、叩きつけ

られるかに見えたが、四足を踏んばってすつ

くと降り立つ。

その前方に降り立つグレンダイザー。

70 ジガジガ、操縦席

きつと睨むモルス

71 フリード星（回想）

山道を疾走するモルスのオートバイ。

ハッと急停車。

行手に停まっているオートバイ、側に立つ

デューク。

モルス「デューク！」

拳銃を抜く。

デュークも拳銃を抜く。

モルス、射つ。

だが、デュークの方が一瞬早く、あつと倒れるモルス。

72 草原

対峙するグレンダイザーとジガジガ。

モルスの声「デューク、覚悟！」

胸の角が真赤に燃えて回転し強烈なベガト
ロン光線が発射される。

73 グレンダイザー・操縦席

光線を真向から浴びるデューク。
デューク「すさまじいベガトロン放射能だ！ ううっ！」

腕から肩にかけての傷に激痛が走り、苦悶して服をひき裂く。

74 草原

どうと仰向けに倒れるグレンダイザー。駆け寄るジガジガ。

その眼窩に姿を現わすモルス、グレンダイザーを見下す。

操縦席に仰向けに倒れているデュークが見える。

腕から肩にかけての傷跡が消えている。

モルス「とどめだ！」

角の先端でデュークをびたりと狙う。

きつと見つめるモルス――

75 フリード星（回想）

ベッドの上で気づくモルス。

肩口の傷が手当てしてある。

側に立っているデューク。

じつと見つめ合う二人。

デューク、黙って部屋を出ていく。

じつと見送るモルス。

モルスの声「デュークはおれの傷を手当てして隠まってくれた。傷がなおった時、新しい王は戦争に負けて死んでいた。おれは敗戦後のモール星に帰った……」

モルス、窓の外に目をやる。

美しいフリード星の自然――

モルスの声「それから間もなくだった、あの美しいフリード星が滅亡したのは……」

76 草原

じつとデュークを見下すモルス。

モルス「国を亡くしたお前にとどめを刺せない、デューク、これで借りは返したぜ！」

眼窩の奥にさつと消える。

ジガジガ、デュークを狙っていた角を上げてさつと駆け去る。

77 ダブルスペース・操縦席

甲児「大変だ！ デュークがやられた！ ベガ獣にやられちゃったよう！」

急降下していく。

78 空

飛来するマリンスペイザーとドリルスペイザー。

ひかるの声「大介さん！」

マリアの声「兄さん！」

眼下に倒れているグレンダイザー。

79 草原

着陸するスベイザー二機。

とび降りて駆けるひかるとマリア。

ひかる「大介さん！」

マリア「兄さん！」

グレンダイザーの側に笑顔で立っているデ

ュークと甲児。

ポカンと見るにかるとマリア。

デューク「傷がなおったんだ！ ベガトロン放射能でやられた傷がなおったんだ！」

裂けた服から見えていた腕から肩にかけての赤い傷跡が消えている。

操縦席にとび乗るデューク。

すつくと立ち上るグレンダイザー。

80 東京

狂ったように暴れるジガジガ。

破壊されていく東京の街。

ジガジガ、ハッと見る。

そこにすつくと立つグレンダイザー。

デュークの声「モルス、戦いの悲惨さを知っているお前ではなかったのか！」

モルスの声「新しい王国を作るためだ！」

デュークの声「この地球を第二のフリード星にはさせないぞ！」

モルスの声「おれたちはどうしても決着をつけなければいけないようだな」

デュークの声「モルス！」

モルスの声「デューク！」

ジガジガの胸の角が真赤に燃えて回転し始める。

デュークの声「スペース・サンダー！」

ジガジガが光線を発射するより一瞬早く、スペース・サンダーが眼窩を照射。

ジガジガ、まるで悲しみのような声で吼えて、爆発四散。

81 宇宙科学研究所・屋上(夜)

夜空に星がきらめく。

大介がじつと夜空を見上げて立っている。

大介の声「どんな治療をしてもなおらなかった傷が……ベガトロン放射能による傷が、より強烈なベガトロン放射能を受けてなおった……モルスがくれたこの命のある限り、モルスを狂わせたと悪と戦う……それがモルスへの手向けの花だろ……」

夜空に、ギターの合奏をするデュークとモルスの姿が淡くうかぶ。

じつと夜空を見上げて立つ大介。

(終)

※このシナリオは、手持ちのものを改めて入力したものです。今回、私がこのフィクを書いた理由や、放映されたものとの比較をするために、どうしても元の形と見比べる必要があったため、全文引用しました。

一カ所、「モール星」となるべきところが「モルス星」となっていますが、原文を尊重してそのままにしました。略字などがつかわれていてフォントが無い部分だけ、最近の日本語表記に改めた他は、全て、当時のシナリオ通りのテキストです。

あとがき (ネタバレ注意)

グレンダイザー七十一話「悲劇の親衛隊長モルス」のリメイク小説を書いてみました。リメイクにあたっては、シナリオに可能な限り準拠しつつ、本編の設定も活かすということを目指しました。

この回は、演出によって脚本から大幅に変えられてしまった回です。どこがどのように変えられたかを簡単にまとめてみます。参考までに、田村多津男氏によるシナリオを全文引用して参考資料として添付しましたので、興味のある方は本編と見比べてみてください。なお、この回の変更は、演出の小湊洋市氏によるものです。小湊氏がいかに公式設定から本編の内容を変えてしまったかについては、小湊氏が演出を担当した回のシナリオと放映内容を比較した、英氏による解説があります (<http://www.ta.biglobe.ne.jp/~zgd/Lecture/theory-4.htm>) のでそちらを呼んでいただくとして、一言で言うなら、小湊氏は、公式設定を無視しまくる演出をする演出家であったということです。それが、この七十一話でも発揮されています。

まず、モルスのポジションが違います。シナリオでは、モール星の王子モルスは、モール星の生き残りの

ために自らベガ星連合軍に身を投じています。一方、本編では、拉致され洗脳された結果、デュークを憎むべき敵と思い込んで出撃してきます。

次に、デュークの腕の傷ができた原因が違っています。シナリオでは、フリード星最後の時に、追ってきた円盤に撃たれたためということになっています。一方、本編では、留学中のモルスをベガ星の攻撃から逃がそうして宮殿を移動中に襲撃され、宮殿の壁から落下しようとするモルスを助けたためにできたことになっていきます。デュークの傷のエピソードが放映された回は他にもありますが、いずれも、一人で逃げている途中に傷を負ったシーンとなっており、親友を助けたという話は、(デュークにとってはかなり重要な話のはずなのに)全く語られていません。モルスを助けたためにできた傷である、ということは、この回になって唐突に出てきます。

モルスとデュークの友情物語について。シナリオでは、モルスが留学中にモール星で国王が崩御し、代わって即位した新王が戦争好きで国を疲弊させているのを止めさせようとするモルスと、中立を守るためにモルスに行動を起こさせるわけにはいかないデューク、という立場の違いが示されます。モルスは、フリード軍の円盤を強奪しようとしたわけで、理

由はともかく、やろうとしたことは犯罪です。フリード星の統治に関わるデュークとしては立場を取り締まらなければならないはずですが、デュークはモルスをかばって匿います。ここでモルスの命を助けたから、モルスが地球に攻めてきた時、最初はデュークにとどめを刺さず恩返しのかわりにする、という展開です。一方、本編では、シナリオの回想シーンのような友情も登場しますが、モール星の事情などは一切描かれませんでした。モルスがフリード星を立ち去った時期も異なっていて、シナリオではベガ星の襲撃を受ける前であったのに対し、本編では襲撃が始まってからになっています。

この回は、物語の中盤以降ずっとデュークが苦しめられてきた腕の傷が治る、という、重要なイベントのある回でもあります。にもかかわらず、傷が治る理由が、シナリオではより強いベガトロン放射能を浴びたためであるのに対し、本編では傷に気付いたモルスが手持ちの銃からベガトロンマイナス光線を発射することで傷を治す、というふうになり、まるで違う展開です。しかも、シナリオと本編のいずれも治る理由が唐突で、デウス・エクス・マキナの印象がぬぐえませんが(別名子供だましとも言いかもしれない……)。より強いベガトロン光線で治るといっているのであれば、これ

まで大変な思いをしたのは一体何だったの？ ということになりますし、ベガトロンのかなり有毒で有害であるという描写がなされてきたのに治療効果もありました、というのは何というかもすごいオチです。かといって、洗脳されてデュークの前に現れたモルスが、都合良くベガトロンのマイナス光線を出せる銃を持つている、というのも説明が難しいでしょう。

シナリオを手に入れて読んでみたところ、シナリオの方が、総じて本編の他の回との矛盾は少ないと思いました。

ただし、当時の視聴者である子供にとつてわかりやすいのは、小湊氏の演出の方ではないかと思えます。洗脳されて戦わされる悲劇は、本編の他の回でも出てきました。また、親友の命を助けるために怪我をして、その結果長期間にわたって苦しむ、というのもヒーローの物語としてはびつたりはまります。一方、強い国に従って侵略に荷担することで弱小国の生き残りを図る、というのは、歴史上いたるところで見られたことではあります。その行動をとる者はヒーローとしての条件を満たさないでしょう。デュークの親友としては、卑怯で勇気の無い奴、ということになってしまいます。ある程度年齢が進み、歴史を学んでからでない、勧善懲悪の枠組みでは捉えきれない

小国の悲哀に共感するというのは難しいでしょう。

また、シナリオ通りに絵コンテを切ったとすると、緊迫したロボット戦の最中に、過去のモル星でのデュークとモルスの友情の回想シーンが間に何回も入つて来て、戦闘シーンの緊張感を減らしてしまいそうにも思います。戦いのヒントになる過去のシーンを短い時間一回だけ思い出す、程度ならいいのですが、回数が多すぎるように思いました。

ただ、今になってみれば、シナリオ通りの本編も見てみたかったという思いがあります。

そこで、できる限り田村氏のシナリオを取り入れて、七十一話のリメイクに挑戦してみようと思いましたが、とはいえ、アニメは作れないので小説で試みてみることにします。

まず、モルスの立場は、シナリオ通り「自国民を救うためにベガ星連合軍に加わった」というものとします。モルスの星のお家騒動(?) もそのままあつたとします。

次に、傷が治る経緯については、小湊演出を採用し、モルスがベガトロンのマイナス光線を発射できる銃を持つている、としました。シナリオ通りの「より強いベガトロンの光線を浴びたら治った」では、有毒有害だということまでの設定は一体どうなったのか、とい

う疑問が残ります。さらに、最後にデュークが「モルスのおかげで傷が治った」と思うに至っては、モルスは傷のことなんか関係無しにガチで倒しに来てましたがそれが何か？ という状況ですから、そんなところで勝手に感謝されても何だかなあ……と天然ボケデュークに突っ込みを入れるしかありません（爆）。また、勝手に治ってしまいました、でも、モルスの光線銃一発で治りました、でも、今までさんざん心配して手当してきた宇門博士の立場がありません。ですから、傷の治療は最終的に宇門博士によってなされることにしました。

そうなると、治療の経緯を説明しなければいけなくなります。小説ですから、「傷があります」の一言だけ書いたのでは傷はできてくれないわけで、本編ではメカニズムまで書かれていなかった、ベガトロンの傷と宇門博士の光線治療器の機能をきちんと文章で書く必要が出てきます。

本編での描写では、「傷の中にベガトロン放射能が入り込んでいて、地球製の放射能測定器で検出できない」「宇門博士の光線治療器は傷みや傷の進行を抑えることはできるが治すことはできない」「光線治療器は弱っている小鳥にも効果がある」「ベガトロン放射能を浴びると傷が痛んで悪化する」「傷が広がると

デュークは死んでしまう」「死なないためには傷が広がる前に右腕を切断しなければならない」といったところでしょう。そこで、本編には無かったSF設定を追加で入れて、本編の描写と矛盾しない形でつじつまを合わせることにします。

まず、光線治療器が鳥にも効くということから、自然治癒力を高めるとか、細胞の入れ替わりを助けるといった効果がある、と設定します。すると、デュークの傷に対しては、ベガトロン放射能で細胞が死んでいく分だけ、光線治療で細胞を増やしている、という話になります。これなら、一時的に細胞を回復させても、入り込んでいるベガトロンでまた悪化しますから、「痛みを一時的に抑えることはできるが、完全に治す方法は今のところはない」という宇門博士の台詞と矛盾しません。ベガトロンを完全に消し去るか取り除くか意外では完治しない、ということになります。

次に、なぜベガトロン放射能を浴びると傷が痛んで悪化するのかの説明が必要です。放射線障害の一種というイメージだとすると、傷が無くても被曝でまづいということになります。甲兎君達もベガトロンビームの影響を操縦席で受けていますが、後で健康被害が出て困っているという話はありません。それな

らば、現実の放射線の影響が細胞周期の段階によって違ふというのを流用し、光線治療器による治療後ベガトロンの存在している状態では細胞周期が変わり、ベガトロンの影響を受けやすい時期が長く続き、といったSF設定を入れれば、デュークの傷のみが、治療を行っていてもベガトロンの敏感である、ということの説明ができます。人間をはじめとする地球の生物がフリード星人に比べてベガトロンの弱い、というのは、特に本編中では語られていませんでしたが、入れておくことにしました。その方が、治療法を探すシーンで使うことができ便利です。

腕の切断が必要な状況というのは、切断しないと癌が転移するとか、組織が壊死を起こして敗血症を起こす可能性がある、といったところだろうと考えました。後の方を採用し、ベガトロンのせいで皮膚や筋肉の細胞が壊死していくため、傷が広がる前に腕の切断が必要、という理由付けをしました。私は医学には素人なので、専門家に訊けばこのあたりはもつといい解決策を教えてもらえるかもしれません……。本編では、単に皮膚の上が赤く腫れているだけに描かれていましたが、あんなものではなくて、皮膚は無くなり筋肉の一部も融けてしまっている、もつと痛ましい状態として描写することにしました。

そうすると、モルスがベガトロンのマイナス光線を発射できる銃を持っている理由にもつながります。ベガ星連合軍に加わると、兵士にされたり、ベガトロンの鉱山で働かされたりしそうですから、モール星人にも、ベガトロンの放射能の怪我をしてデュークと同じ症状になる人が大勢居ると考えても、そうおかしくはありません。すると、治療のためにはベガトロンを消し去る道具が必要になりますから、モルスがマイナス光線を開発する理由ができます。ベガトロンを消すものだとすると、ベガ星連合軍のエネルギー源を消滅させることになって、ベガ星への反抗と受け止められることは必至でしょう。ですから、モルスは密かに開発して隠し持つしかありません。

ベガ大王に忠誠を誓って自国民の生き残りに賭けているモルスの目には、自国民を殺された後逃げ出したデュークというのは、国王としての覚悟が足りないことと映ることでしょう。ここから、最初の戦いの時の台詞を決めました。さらに、モルスがそうまでしても今度はベガトロンの影響で実は自国民の危機、という状態ならば、悲劇性も出せると同時に、最初の戦いでデュークを責めたのは、そうでも言わないとやってられなかったからだ、という展開ができます。すると、負けたと分かった時にかつての親友デュークにマイ

ナス光線を託しても不自然ではなくなりません。

ここまでで、SF設定と二人の立ち位置とつながりが決まりました。

次は、シナリオに沿って場面を決めます。

小説ですから、ベガ星側を長々と書かない方が、話の展開がすっきりすると考え、シナリオのベガ大王側のシーンはぼつさりカットしました。もしアニメにするなら、シナリオ通りにベガ星側を描いた方がわかりやすいでしょう。

そうすると今度は全体に短くなりすぎますので、短編にするために、宇門博士とデュークの心理描写を多めにして、全体に普段よりは丁寧に書いてみました。もつと甲児君を追いかけてもよかつたのですが、この長さで描写する人物を増やしすぎると逆にまとまりがなくなると考えて、書かないことにしました。

傷の痛みには耐えるデュークと心配する宇門博士のシーンはそのまま活かします。これと前後して、宇門博士が、ベガトロンの傷の治療法を探しているシーンが必要です。また、戦いの最中の回想は避けなければいけませんから、デュークにモルスのことを語ってもらうシーンが別途必要になります。語る相手は、宇門博士か甲児君しかいないでしょうが、宇門博士を割り当てました。

書いてないことは読者に伝わらないし、かといって戦闘中のインタールバルで長々とベガトロンの性質の話をするわけにもいかないので、治療法探しのシーンと一緒に宇門博士に語っておいてもらうことに。

ダイザーチームがパトロールに出てからジガジガと遭遇するシーンはほとんど同じです。ただし、台詞は追加していません。

一回目の戦闘でデュークが倒れた後、シナリオと違つて傷は治りませんから、むしろ手当が必要になります。研究所に呼び戻す余裕はないですから、宇門博士に向いてもらうしかない。

二回目の戦闘でジガジガを倒した後、モルスから銃を受け取らないといけないので、先に切り離された操縦席の方で、モルスは怪我をしながらもしばらくは生かしておきます。

銃開発の理由をモルスに語らせ、モルス死亡で戦闘場面終了。

あとは、受け取った銃を利用して、宇門博士がデュークの治療をして完結となります。

演出でカットされたり変更されたりしたシーンはかなりありますので、シナリオを参考に、あり得た物語、として再現を試みるというのも、ファンとしてはまた楽しい作業でした。

- このファイルのダウンロードURL
<http://www.frontier-line.org/dl>
- このファイルのダウンロードキー
altair

元ネタ&ネタバレ集

二〇一一年 十二月二十六日 ver.1
裕川 涼